

## 馬奈木昭雄弁護士オーラル・ヒストリー (三) 水俣病とは何か

土 肥 勲 嗣

## 解 題

水俣病が公式に確認されてから六四年が経過した。

水俣病はすでに過去の出来事となったのだろうか。水俣病患者が裁判所に提訴したのは一九六九年であるが、半世紀が経った現在でも水俣病の被害を訴えて裁判所に提訴するひとびとは絶えない。水俣病とは何か。水俣病問題とはいったい何を意味するのだろうか。

広辞苑(第七版)は、「水俣病」を「有機水銀中毒による神経疾患。四肢の感覚障害・運動失調・言語障害・視野狭窄・ふるえなどをおこし、重症では死亡する。一九五三〜五九年来に熊本県の水俣地方で、工場廃液による有機水銀に汚染した魚介類を食したことにより集団的に発生。六四年ごろ新潟県阿賀野川流域でも同じ病気が発生(第二水俣病)」と記している。

馬奈木弁護士は、水俣病第一次訴訟が提訴された翌年の一九七〇年十二月、水俣市に事務所を開設して、患者の救済活動に従事された。馬奈木弁護士は、水俣病問題をどのような

に理解しているのだろうか。

ところで、水俣病についての政治学の業績は多くない。石田雄は、『公害の政治学』を書いたのは自然科学者の宇井純であって、政治学者ではなかったということ、日本の政治学者の怠慢を示す以外の何物でもない」と指摘している(同『日本の社会科学』東京大学出版会、一九八四年、二二〇頁)。また、「この本の内容が政治学の名に値しないという政治学者は、自分でこの題に相当する本を書かなかったことを恥じるべきであろう」と回顧している(同『社会科学再考―敗戦から半世紀の同時代史』東京大学出版会、一九九五年、一七四頁)。

なお、オーラル・ヒストリーの収録は、二〇二〇年九月十八日および同年十月十九日の二回にわたって、今回も久留米第一法律事務所です約六時間おこなわれた。馬奈木弁護士には、コロナ禍で大変な状況の中、マスクを着けて、ご協力いただいた。また、今回も古田順子さんのお手を煩わせた。記して御礼申し上げます。

## コロナと水俣病

水俣病についてはいろいろな視点がある。あんまり言われていないことを言っておきたい。水俣はたいがい議論されたと言うけど、私に言わせると、型通りの議論がされたのであって、本当に必要な議論はされていない。水俣特有の歴史があるから、いわゆる告発系の議論はみなさん一生懸命参加されているけど、私たちが提起している問題はまったく無視ですものね。告発系の議論というのは、技術屋さんが多いから、どうしてもチツソの技術が悪かったという議論が中心になる。そうではない。水俣病の問題はチツソの技術の問題だけではなくというところがずとんと落ちる。

ひとつはマスコミの問題でもある。今度のコロナの問題でも、たとえば医療従事者、その子どもさんたちが大変な目にあっている。たとえば、保育園に来るなといわれたとか。大変だ大変だといって、マスコミも取り上げて指摘するのはハンセンですもんね。ハンセンを取り上げて指摘するのはハンセンですけれども、水俣がそういう目にあったことを忘れないでほしい。水俣は真っ先にそれで被害を受けた。ある意味でそっちの被害が社会的影響としては大きい。完全に差別された。いまの騒ぎが起きててもハンセンの指摘はあっても水俣病の指摘はないですよ。

水俣病問題とは何なのだろうか、どう考えるのか、整理がいるのではないか。いまのコロナ騒ぎの差別の問題、実は水

俣病でも同じ問題で出発している。水俣病で差別があったという方はたくさんいらつしやるけど、その差別が日本社会の全体構造とどう結びつくのか、という視点はあんまりおつしやらないですよ。たとえば、ハンセンの熊本裁判は水俣病の弁護士団が中心ですもんね。だから一番理解しやすいかと私は思いますよ。水俣病の弁護士は無条件で理解できた。もつと酷いかたがかった。本質的に起こっていることは同じことだね。コロナ騒ぎで医療従事者が酷い目にあう。日本においてはごくごく普通のことだと思ってる。

## 「半沢直樹」と社会通念

「半沢直樹」というテレビ番組について自由法曹団で激論がおこなわれている。激論と言えば言いすぎですけど。私が最も敬愛するある先生が真正面から半沢直樹は到底許せないという論考をお書きになった。やられたらやりかえす倍返しだ。もちろんやられたらやり返す、そのやられ方が悪質、それは間違いない。大企業、銀行なり日本政府がとんでもないことをやっているのはその通りなんだけど、ではやり返すといった被害にあった側が倍返しするためにやっていることは全部違法行為じゃないか。支店長をおびき出して家探ししたり、やっている行為は違法行為の連続である。だから、やり返すという目的が正義を貫くためだということはあるにしたらって、手段を選ばずに何でもやり返す、それを拍手喝采す

る状況ですよね。視聴率が当然いい。それはいけない状況だというのがきちんとわかれと書いたわけですよ。

それを受けまして、ある事務所のナンバー2のベテランがお書きになった。おっしゃる通り「説」ごもつとも、自分も無邪気に拍手喝采していたが、指摘を受けたら確かに自由法曹団員たるものこんなもの喜んでいてはいけない。だけど、われわれの世代、破れ傘刀舟、文字通り浪人ですけど、まわりの困ったひとを助けに立ち上がって、悪代官やら悪商人を「てめえら人間じゃねえ、叩き切ってやる」と、人でないから人権もない。ジェノサイドを文字通り実行しているわけですね。適正手続きなんかあったものではない。それをみてやっぱり拍手喝采したよね。それを許されるというのは、純然たるフィクションだと全員わかっているからそれで許されるのだらうかと。いまの半沢直樹はもちろん心優しい銀行員。そっちの方が完全にフィクションで、ありえない話だけど。違法行為はけしからん、許されないと真正面から指摘しますよね。テレビ画面の下に「これは違法行為」ですと。フィクションだから許されている。良い子はけつして真似をしないようにというテロップが流れていれば許されるのか、その議論に腹を抱えて笑った。確かに今のテレビ局はやりかねないですものね。正論は正論なんですけど、正論を真正面からいってもこの問題解決にはならないじゃないのかと。社会一般では受け入れている心情がある。受け入れているわけですから。「こんなことを言ったらまた叱られるかな」って。私も文章を書

いて参加しようかなと思った。

水俣で告発グループの人々が主張した「水俣病のたたかいは、患者とチンソが相対で血債を取り立てるものである」という考え方と、さらにはその血債の取り立てを告発する会のみなさんが「義をもつて助太刀する」という考え方とある意味では通じる感覚があるように思えます。

私は責任論のところできちんと問題にしたい。裁判の勝敗を決めるのは世論だと。裁判というのは政治的なものだというのが私の意見です。それはイデオロギーで判断するのではなくて、世論が結論を決める、と言ってわれわれは勝つてきた。それが一番わかりやすいのが水俣病第三次訴訟の第二陣判決、国の責任ですね。裁判所は、水俣病は国の責任だというのは社会通念だと、社会が承認していますよと言ったわけですね。逆手に取られたのが川内原発なんです。火山を危険だと思わないのは社会通念だ。いま社会通念で負けているわけですね。水俣病問題はそれを正面から問いかけた裁判でもあった。公害問題に対しては、社会の世論はけつして許さない、公害を許さない、企業の利益よりも人の命ということ、少なくとも四大公害裁判のあとは、経済的利益と人の命は秤かけてはならない、秤にかからないという原則が確立した。それは社会通念だと。しかし、原発では、平然と経済的利益の方が上だと言いつける判決まで出てくるようになったという問題がそもそもありますよね。

## 水俣病とは何か

水俣病とはいったい何なのか。普通のとらえ方は、テレビで報道される劇症型の患者さん方ですね。痙攣する姿、いまはそれも見なくなつた。最初われわれがやっていたときの水俣病はその姿、それと猫が狂う様子、これが水俣病だと。これが水俣病問題だと。つまり、限定された限られた人の病気の重大さ、人身被害の大変さ、限定されたせいぜい数百人の重大な人身被害を解決する問題、あるいは救済する問題というのが一番基本的パターンではないでしょうか。水俣病問題とはそういう問題です。それは企業と国が作為的につくりだした姿なんですね。被害をできるだけ矮小化する。被害の実態が見えないようにする。最重症のもだえ苦しむ姿だけが水俣病だと。それ以外は違う。その問題を解決すればいい。われわれが裁判をしたのは一次訴訟で原告はせいぜい百三十名、患者の所帯数は三十四ぐらいです。認定患者は他に二百世帯ぐらいいる。その数です。その被害をどうするかという問題ですね。

そうじゃないでしょう。当然のことながら病気も、最重症のひとつから底辺まで、一番底辺はごく普通の状況、ちよつと手足が痺れる。この地域で生活をしている全員が大きい被害からごくごく軽微で普通に日常生活を送っているひとまで、連続してあるんだよねという認識ですね。この認識が何故専門の医学者の間で常識にならないのか理解できません。特に

国の立場にたつて医学者はそれが常識だと考えない、考えないふりをしますよね。

その一番わかりやすい例が水俣病を否定する論理として加齢を挙げる。年のせいです。「ちよつと手足が痺れるのです」「言葉がうまく出ません」「難聴ですけど」、「それは加齢でしょう」と。一時期笑つたのですけど、われわれが一次訴訟で勝つたあと、新潟の椿先生が委員長になって、第三水俣病を否定した、いわゆる白判定というのをやるんです。原田正純先生は、集まつた専門家の顔をみたら、「水俣病の専門家ではない」とおっしゃつた。いまだつたら生活習慣病という言い方をする、高齢者の病気の専門家です。加齢現象でたとえば難聴があるとしたら、あるいは頸椎の障害があつて痺れがでる、それを見つめる専門家です。それを見つければ水俣病ではない。そんなことないでしょう。その病気もある、水俣病もある。当然一定の地域で生活をしているひととのなかには、日本中全地域にある病気をもっているひともあるわけですから、その病気をもっているひとのうえに、汚染物質の負荷がかかっている、という当たり前の発想ができない、あえてしない。だから御用学者だといつてもいい。

私たちが二次訴訟をやったときに三重大学の四日市公害の認定審査会の会長を証人に呼んだわけですね。四日市で認定をどうするのか。地域にはもともと喘息をもっている患者さんなんてごく普通にいます。喘息をもっている患者さんがいたら、そのひとは公害患者ではないのか。そんなこと

はありません。いままでの一定の病像があつたうえに汚染がのっているわけだから、という説明をしていた。大気汚染の方ではそのようにもとの喘息患者も認定をやっていますよ。なんで水俣ではやれないのか。

水俣で検査すると、地域によっては四肢末梢性の感覚障害がすごいところでは九割という数字がでます。水銀の汚染のない普通の地域で四肢末梢性の症状がでてくるのはどれぐらいですか。一割いるわけじゃないね、というのが定説ですよね。誰が考えたって九割というのは水俣病に決まっている。水俣病という言い方が気に入らなければ、チツソが排出した水銀、その他有毒物質によって影響を受けたひと。国や加害企業は水俣病と認めないように必死で努力している。

### 地域全体の破壊

じん肺でも強調したように、国や企業は個別の企業と個別の原因物質、個別の被害者との対応関係で物事を処理しようとする。そうではなく、全体の汚染、地域全体の汚染が、地域全体の住民にどういう影響を及ぼしているのか。大きな病氣、重大な病氣だよ、という話だけではなく、汚染によって普通の生活をおくっている普通のひとから汚染を受けている被害の程度がだんだん大きくなっている、連続した地域社会の汚染の被害全体像があると考えるべきだ。だからチツソがやった犯罪というのは何かというと、特定の重病者を生み出

したことだけではなくて、地域全体を破壊したことです。一定のグループは環境汚染だけを問題にしますけど、もちろん環境汚染が全体に起きているのは間違いない。だから被害者だというのは地域全体だよ。普通にある病氣の症状として出てきている人まで連続している。と同時に破壊したのは環境だけじゃないでしょう。社会全体を破壊したのではない。地域支配というのは政治から経済、文化、全体を破壊したのではないですか。だから水俣病というのは地域社会、文化的、あるいは経済的、それと環境、健康含めて、総体として破壊した。地域破壊の全体が水俣病問題だというとならえ方が正しい。そういうとならえ方を水俣病は必ずしもされていないと思います。重症者の人体被害、軽症でごくごく普通のひとまで切れ目なく連続している。加齢だけが加わると発病する。それは加齢が原因ではない。普通だったら発病せずにすんだものを汚染があつたもんだから一定の加齢で発病する。ほかの病氣でもそうなんです。チツソによる地域社会の破壊は事例をあげていけば数限りがない、という捉え方ですね。

被害とは何なのか。病氣の人身被害だけではなく社会的にもたくさんある。地域を破壊したこと自体が被害なんだよ。その被害を考えるとときに当然それを生み出してきたものが何なのか、という加害の行為があるわけですよ。被害と加害というのは両面一体になって考えるべきもので、それぞれ切り離して考えるものではない。加害行為としてチツソが何をやったのか。その結果、起きている被害の方から加害行為を

みる。この被害はどういう行為で起こったのか。法律の世界で裁判官はたぶん切り離して考える。加害行為があつて結果として生じた被害がある。その間の因果関係というけど、そうではなくて、お互いの相互作用で考えることがなかなかできない、本質的にそう考えようとしれない。いまの法科大学院教育ではむしろ逆にしてはならないと教えられていると理解しますけど。そういうところまで踏み込まないのが正しいのだというものの考え方だと思ふんですね。それは実態を隠し責任をごまかす論理だと思ひますね。

## 国の責任

いまのように全体像を考えると被害を生み出したものは何なのか。一番狭い意見は「チツソの技術です」という答えになる。「チツソの技術です」というのは一部の説明になつても全体の説明にはならない。特に文化まで、社会生活のひととの結びつきまで破壊したのは、単なるチツソの技術の問題ではない。ただ、チツソという会社が酷い会社であつたというの事実だと思ひますよね。いわゆる旧財閥系の企業と比べて、後発の追いつけ追いつけの精神で突つ走るからですね。強制力の働かせ方は、昭和電工と比べてチツソの方が酷い。昭和電工は財閥系の大企業で余裕がある。

地域破壊したのはチツソだけなのか。程度の差はあるにしたつて、当然同業他社もそれぞれ同じことをやっているで

しょう。水俣病が水俣だけに起きたのはおかしいよね。もちろん新潟にも起きた。水俣と新潟だけにしか起きていないというのもおかしい。水俣、新潟だけ起きたという科学的な説明はあるわけがないと思ひます。同業他社も同じ問題は大きな小なり起こしている。水俣病を起こしたのはチツソの技術というのは、被害を大きくしたというプラスアルファの理由としてはありえるけど、根本的な説明にはならない。同業他社に起きている説明にはならない。全体として起きている被害をとらえるとしたら、やっぱり国の行為、すなわち国の産業政策が原因だということに論理必然的に辿り着くと思ひます。だから国の責任を問うのはある意味では当たり前、問わない方がおかしい。つまり、最初から責任を限定して考えている、被害を限定して考えているわけですね。水俣病を考えたときの一番基本、いまの論理展開が一番わかりやすい形で起きているのがチツソだと。

チツソの場合も産業政策といひますけど、簡単にいうと、ひとつは植民地支配です。日本の侵略戦争と同時に海外へ膨張していく。チツソの海外膨張はちょうど侵略戦争に乗っているわけですね。朝鮮半島に進出し、満州に進出する。産業政策で植民地支配に乗つていった。チツソが朝鮮興南工場をつくりますよね。創業開始した野口遵社長の弟が画家で、興南工場の絵を描いてお祝いに社長のところにもつて行つたら、社長はその絵をみてカンカンに怒つて工場長を呼びつけた。「煙の色を見ると原料が煙の中に逃げている。こんなバ



かな操業をなんでしているのか」と怒った。有名な話なんですよけど、「労働者は牛馬と思え。牛馬と思わんと情が移って仕事はさせられない」。それはチツソが悪い会社だからという話ではないというところを強調したい。それが産業政策と、それに従う企業の本質ではないかと思う。

そこにあるのは国策としての植民地支配です。興南工場では憲兵まで使い、警察権まで使い、土地を強制的に取り上げて、あれだけの工場をつくった。発電所を作るため「川の流れを変える」という、絶対にものごとが起こりえないという現地の格言があつたが、その川の流れを逆行させた。海へ落ちる方向を逆にさせた。一企業のするところではない。国の産業政策です。

だから戦前から水俣病があつたというのがわれわれの主張ですよ。何も昭和二十八年に突然起きたわけではない。熊本大学の十年後の水俣病研究班が最初の発病患者として確認している患者は昭和十六年、昭和十七年ですもんね。そこで産業政策の二番目は戦争そのものです。水俣病は戦争によって発生したということをわれわれは忘れてはならない。

水俣工場は憲兵が常駐する軍需工場でした。戦争遂行に最も必要な工場でした。そこで無謀な操業が行なわれた。漁民は工場が排出する汚悪水被害に堪り兼ねて、補償を要求して工場におしにかけています。驚くべきことにチツソは戦時中にもかかわらず、追い払うことをせず、漁業補償協定を結び締結した補償の支払いをしました。この協定書において漁業被

害を発生させている原因は「工場汚悪水」だと明記されています。私が考える一番のポイントは、この補償協定は被害発生を防止することが目的ではなく、今後被害をだし続けることを漁民に認めさせる目的になっているということです。今後も従来以上に被害を出すこと、被害者がそれを承諾させられた宣言文です。このことは水俣病患者に対する見舞金契約でも貫かれています。チツソは被害を防止する気持ちはないのです。私たちは訴訟で、新たな契約を結ばせたこの見舞金自体がチツソと行政の新しい不法行為として論じています。

三番目が戦後です。荒廃したなかから不死鳥のごとくチツソが蘇ったのが、国の産業政策である傾斜生産方式ですよ。傾斜生産方式で国が予算をつぎ込んだ企業が、チツソ、昭和電工、第三位が三井東圧です。だからその工場付近に第三水俣病があるに決まっていると思っております。国の産業政策から考えてそうならざるをえない。いわゆる傾斜生産方式の後、石油化政策です。エネルギー転換です。これが決定打になった。国の産業政策の流れと水俣病の患者発生の流れを比較してみる必要がある。くどいけどもそれは全国共通の問題なんですよ。

余談ですけど、私が筑豊じん肺と水俣病を両方やっているから、その意味が弁護士の中では一番わかるつもりでいます。筑豊じん肺の国の責任が問われた年が一九六〇年からです。水俣病の国の責任が問われた年が一九六〇年からです。これは偶然一致したものではありません。石油化政策で考えたら

当たり前のことです。要するにスクラップアンドビルドですね。筑豊じん肺でスクラップアンドビルドが原因だと最高裁も認定した。残念ながら関西水俣病の最高裁判決は、そもそも強く主張していないから認定していないだけで、われわれの三次訴訟では国の産業政策、石油化政策の責任をきちんと認定している。特に三次訴訟の第一陣は法律の議論としてそれを認定して、そして第二陣の判決に至っては、国に責任があるのは社会通念とまで言った。水俣病において、国がチッソを徹底して擁護したのは、チッソ一社をかばったのではなく、国自らの産業政策の遂行を守りたかったのです。大きなとらえ方をまず最初に考えておきましょう。産業政策の問題なんですということですね。あんまり水俣病の議論をするときに指摘されない。チッソのえげつない利益追求の本質を見ないといけないという視点です。

### 被害とは何か

次の問題ですけど、そもそも現地の被害をどう考えるのか。最初の建設のとき、土地取り上げと特別の利権を得ている。丸島港はチッソが専属港として優先的に使える権利、それから曾木の滝で発電した電気をチッソ工場まで引いてくる。競争相手が出水だったわけですよ。水俣まで引いて増える分は行政が負担するとかね。いろんな特別優遇措置があっている。成立するときから行政の優遇措置を受けて、地域支配、利権

構造に絡んでいる。あと当然工場労働者、それから水の排出先の漁民、そして住民が被害を受けていくことになりますね。水俣病発生当時、昭和三十年代初頭、日本で降下煤じん量が一番高かったのが川崎だと言われるのですが、丸島というところは一集落だけで言えば川崎を上回っている。だからチッソの方が日本一地域よりも多い。二酸化硫黄（SO<sub>2</sub>）も全国で高かったのは四日市ですけど、四日市を上回っていた。チッソはなにも有機水銀だけを選んで流したわけではない。工場内のありとあらゆる毒を排出したのであって、そのうちの有機水銀だけが被害を与えて、他の有害物質は被害を与えていないなんていうことはありえない。これも被害を矮小化する論理ですよ。

チッソが排出したありとあらゆるものの被害、その被害が当然地域の住民に起きているわけで、海に流したら当然漁民が被害を受けている。大気中に放出するものだから近くの集落では酷いところは、粉じんが屋根の下に入って溜まるものだから屋根瓦が浮く。ちなみに家のなかにも粉じんが降って、歩くと畳に足跡がつく。チッソの工場の横に丸山という山があるんですけど、そのふもとに湧水があつて、死に水にするということとでみんな取りに行っていた。チッソの敷地内になったからとれない。チッソ側の方に向いているお墓がその面だけ全部変色している。裁判官をわざわざ見せに連れていった。死んでもからもチッソの汚染被害に苦しんでいる。決して人身被害の酷いところだけではない。地域全体がやられ



ている。日常生活と連続しているところですね。

## 隔離政策

いわゆる差別の構造ですけど、病気についてまず感染症だと思えますよね。ひとつの家族にどつとでる。近所にどつとでる。そうすると感染症だと思ふこと自体は間違いないとは思われないけど、そうすると感染症対策として真つ先にやるのが隔離でしょう。当時は隔離される病気が法定伝染病で、赤痢とチフスとか、天然痘もちろんですけれど、隔離されるのは「避病院」といつていた。山の中にある、避けさせる病院ですね。隔離して閉じ込める。典型的な形で人狩りまでやったのがハensenですよ。水俣病は出さないようにするから人狩りまではやらないけど、どうしても隠し切れなかったらそこに送られる。これは両面あって、行政担当者の説明を聞くと、伝染病だといって隔離されたものだから、家族が酷い目に遭う。水俣では、買物物に行く。まず売ってくれない。売ってくれたらお金を直接受け取ってくれない。品物を棒につけたお盆の上において、受け取った後お金をその上におく状況がお店で起きた。一番われわれが驚いた例が、亡くなった後、解剖させてくれと病院がいうものだから、協力して解剖してもらった。当然家まで御遺体を送り届けてくれると思ったら、自分で連れて帰れと。タクシーに乗せるお金がない。公共交通機関に乗せるわけにはいかない。道路を通ったらみんなか

らいじめられるので、御遺体を背中におぶって病院からすぐ横の線路の脇をつたって帰った。家族の世話をしているから子どもが学校に遅れる。先生がカンカンに怒って、廊下に立たされる。下の子はお兄さんが立たされるのを見るのが嫌で嫌で。くたびれて眠ったら先生からチョークが飛んでくる。地域全体で支えていこうね、という発想ではないのははっきりしている。やつかいもの扱いです。コロナで急に起きた話ではない。ハンセンでも酷い目にあつた。日本では普遍的にやっている。

行政は最初の本気で伝染病と思つたから本気で隔離した。伝染病ではないとわかつたあとでも隔離政策をやめなかつた。行政側の言い訳は、「だって家に帰したら生活できませんよ。病院に置いておく限り待遇は悪くても生活はできますよ」。それは事実なんです。あとからの言い訳かどうかわかりませんが、家に帰ったら何も食べるものがなくて非常に困つたであろうことはおっしゃるとおりです。病院にいる限りは、少なくとも食べ物には食べられる。一定の医療処置も受けることができました。それは事実です。隔離していて酷いことをしたと言われるけれど、行政側から、特に市の行政側から反論がある。患者さんはそのあと熊大にまとめて送られる。伝染病ではないということで、家族が付き添いを許されるわけですね。小さい子どもの場合、お母さんの付き添いが許される。子どもには病院から食事がちゃんと与えられるけれど、お母さんには出ない。だからお母さんのところには、家から芋を

送る。お母さんが子どもの食べ残しにその芋を混ぜて食べたとか、その手の話はいっぱいある。

コロナのような問題が起きた時の対策のありようですね。これまでに流行した伝染病の話がありますけど、必ずしもそれだけではない。いわゆる公害被害というか、伝染病では必ずしもない場合に当たって被害が発生した場合の対処の仕方について総合的にとらえる視点がない。水俣病の教訓として語られないところに私は行政の悪意があると思いますよ。大変な目にあっているのに、行政が隔離政策をとったことに一定の生活補助の面があったと言いつくすのだったら、家族全体の生活措置をなぜ講じなかったのか。伝染病対策で隔離された患者でも同じです。水俣病被害のひとつでですけど、普通の生活を送っている社会があつて、その社会のなかで特定の疾患がでた。いまのコロナですね。周りは一応健全な社会生活が営まれているわけですよ。そうすると、周りはいっぺんしているわけだから、対応は比較的とりやすい。飲食店の制限とかで大きな被害になるわけだけど、それは地域全体で考えようねと今度できていますよね。コロナ騒ぎで初めて出てきたような話ではない。地域全体の対策として考えようねと必ずしも確立した考え方にはなっていない。とりあえず自粛で遠慮しておこうと。そうではなく、地域全体として考えないといけない。水俣病問題からすでに提起されている。少なくとも水俣病の教訓を学んで議論されていけないといけないと思うわけですね。決して「自助、共助、公助」などという

官僚が作った変な造語にごまかされてはいけないと思います。

### 安全とは何か

一番教訓として残さないといけないと考えるのは、安全とは何かという議論です。国の基準を守ることだ。国の基準を守っているから安全なんですよ。規制をかけている行政法規を遵守していれば違法性はない、許される行為だ、法律的使用語で言い直すとそういうことですよね。水俣病では現実的にはチツソの操業は国の基準に従っていますと。工場の排水基準は楽々クリアしている。国の基準で流してはいけないものを流したわけではありませんよ。流していいものだけを流している。しかもそれが飲料水の基準、飲料水として使っているという国の基準に合致していました。だからチツソの排水は飲み水として使用できたというチツソの主張です。ぶつ倒れそうになりますよね。私が一年生でしたからたいていびつくりしました。しかしその主張はウソを言っているわけではなく、事実としてはそのとおりです。

原因物質が必要なんだよ。排水が原因なんだよという議論に対して反論が来るのは、危険な排水か、危険でない排水かは決まっているでしょう。行政法規です。工場排水で流している排水基準がありますよね。排水基準に合致していれば流している排水なので、私が言うように危険な排水だという議論にはならないでしょう、というのが次の議論です。公害被

害で負けてきたのは、行政法規に違反しなければ違法ではない。排水が原因物質と一言では簡単にいえないよ。国の基準に違反した排水が原因物質です、違反していなければ原因物質ではないよ、という議論です。これを突破するのにみんな苦労したわけですよ。だから、わが恩師、原島先生も、私が「水俣に行つてきます」といったら、「馬奈木君、負けだよ」といったのはこれなんです。行政法規違反でなければ違法ではない。それが根本的な誤りなんだと四大公害裁判でさんざん叩きのめしたと思っていれば、この主張がいまだに生きているわけですね。

それが原発です。原発でまだ生きている。国の基準に違反していなければOKだと裁判所は堂々と言いますもんね。いやいや、国の基準に違反してはダメだって、被害が起きたというのが四大公害裁判なんです。という教訓がすっかり忘れられている。カネミ油症もそうですよ。PCBが混入した食品は当時の国の基準だと違反ではなかった、という事実ですね。この事実を専門家と称する国側のひとたちは知らないふりをするからいけません。裁判所がそれに悪乗りして、国の基準に合致していたらいいんだ安全なのだという判決は四大公害裁判以来何を考えていたのかとしか言いようがない。行政法規違反がなければ違法ではないというのは間違いというのが四大公害裁判の判決ははっきり宣言している。国の基準違反かどうかではなく、本当に危険なのかどうか、というそのものの判断をするべきだという議論ですね。産廃処分場

の問題で、直接議論になったところですよ。国の基準の通りに処理していますと作文をしたら行政許可はフリーパスする。電磁波もいままったくフリーパスですもんね。それで被害が起きている。そのうえ、その事実が原発の放射線被害についてまで、基準を甘くする方向に作用しています。

### 原因物質とは何か

法律上の責任を負う「原因物質は何ですか」に対して「有機水銀が原因物質だ」というのは自然科学の観点からも正しくない、法律概念としてももちろん正しくない。法律概念として正しいのは、「チツソがありとあらゆる毒物を流したからだ」、ありとあらゆる毒物とは何ですか、といわれれば、「チツソの排水に含まれるありとあらゆる毒」、だから「原因物質は何ですか」と問われたら「チツソの排水」だと答えるのが一番正しい。法律的に正しいというだけではなく、自然科学的にも正しい。有機水銀が原因だといえ、他の有毒物質を切り捨てているわけだからです。要するに最初原因究明の段階で原因と目される原因物質が転々とする、これまた水俣の原因究明の過程の問題点なんですけど、セレン、タリウム、マンガン、そして有機水銀と原因物質が変遷するわけですね。東京水俣病訴訟の裁判官は、「原因物質は研究によって変遷して、しかもチツソがそれを原因物質ではないと反論したこと自体は結果として正しかったわけだから、チツソが

わかりきっている原因を争って抵抗したと原告側は非難するけど、正しく抵抗したわけだからそこは問題ないだろうが、原告側が言っていることがおかしいよ」と判決で言ったわけですよ。

何がおかしいのか、ということなんですけど、セレンを否定してチツソが反論した。マンガンだといわれたらまたチツソが反論した。だけど、セレン、タリウム、マンガン、有機水銀とずつと探していったのは、全部、チツソの排水のなかの有毒物質ですよ。つまり、最初から終わりまで、チツソの排水が原因だというのは動かなかった。その排水の中の何か。東京判決の論理のおかしさは、特定の原因物質を否定したら、チツソが犯人だということを否定したことになるというものの考え方ですよ。加害企業と国が言ってきたごまかしの論理、テクニクなんですよ。ひとつの原因物質を否定したら自分が原因ではないということにはならないだろう。チツソが流している物質のどれか、という点は最初から終わりまで一貫して動かなかった。つまり、チツソが自分が犯人ではないと言い続けたことは、最初から最後までウソ、でたれめだった、という認定が正しいのであって、チツソが抵抗したのが当たり前だと、それを非難するのがおかしいという東京地裁の裁判官は、これをわれわれがいう、「理路整然とした非常識」、一見理路整然としているようにみえて根本的に間違っている。これが水俣病の東京地裁の判決に如実に現れている。いかにも現代風ですよ。この特定の物質を否定

したら自分の責任がないと一見正しくなりそうですけど、全体のなかのどれかという議論をしているときに、ひとつ否定したら、責任がなくなるというのは間違いですよ。

われわれはその議論を汚悪水論と言ったわけですね。汚悪水論の提唱というのは、チツソの責任の大きな基本の法律概念と合致した。最初に提起した大きな全体の被害構造があつて、それと直結した加害構造がある。表裏一体としての被害構造と加害構造があつて、それを法的に説明する法論理が汚悪水論だったわけですね。国の責任の産業政策論、チツソの責任にとつては汚悪水論です。われわれが汚悪水論をとる限り、チツソの技術論は論理のなかには出てこない。どういう技術だったか、ではなくて化学工場が流した廃液は危ないとみんな思っているのではないですかね。それこそ社会通念です。社会全体の共通認識になっている。

その話を裏付けるエピソードとして、西田工場長を漁民が漁船にのせて水俣湾に連れ出す。生きた魚を船の生け簀に置いておいて、外から水俣湾内にはいると、百間排水口からチツソの排水が流れてくる。色がついているからわかります。そこに船が乗り入れたらたちまち魚がバタバタ死んでしまう。漁民が「そらみる、おまえの工場排水が原因だろうが」、すると西田工場長は平然と「どの毒物が魚を殺したのか特定しないと排水が原因だといえない」。毒物が特定されないと排水が原因ではないと。詭弁に決まっている。その詭弁に決まっている話を東京水俣病の裁判官は、チツソの反論が正しいと

いった、この恐ろしさですね。しつこくいいたい。それが当たり前前の判断のように、いま判決全般がそうなっている。

私はそれを東大医学部長だった白木博次先生に習って「理路整然とした非常識」と呼んでいます。

### 新潟水俣病判決

基準を守つたらいいというけど、現実には被害がでているよね。福島原発訴訟がそうだよ。それに対する反論として予見できなかった、わからなかったという議論に持ち込まれるわけですね。予見可能性の話ですね。だけど、人が死んでいる。法的責任を問うためには人が死ぬ基本的な機序までいるんですか。もう少しいうと工場内の特定の機械で特定の部署で原因物質が精製されて、それがこういう経路を辿って工場外に排出されて、そしてこういう経路を辿って人体に到達し、発病する。しかもその全てを予見できないといけない、という議論です。この発生機序の全部の経路が必要だと新潟判決の裁判官は考えたわけです。全部の経路があるんだけど、工場内のことを原告に立証しろといわれても患者には立証できないでしょう。わかるわけがないから責任追及は門から出たところでいいんだよと判決した。門前説といわれる。

この新潟の判決が高く評価された。「挙証責任の転換」を認めたという論評がでた。「挙証責任の転換」なんか認めていませんし、そんなことを認めてはいけませんというのが私

の意見です。訴訟の根幹ですから、勝手な「挙証責任の転換」を許したら大変ですよ。挙証責任の転換」とは要件事実の立証を原告側がしないといけないということですから、裁判の制度自体が崩壊しますよ。

そうではないというのがわれわれの反論です。新潟判決は、発生機序の過程が全部いるといったところが大間違いです。われわれのように工場排水が原因で、途中でどういう経過を辿ろうが、人体に辿りついて人が死んでいます。途中の経過を問うところではない。当たり前話でしょう。途中の経過をみんな問うというから、立証不可能なことを原告側に負わせるのはおかしいということになる。最初から負わせるのが間違い。「挙証責任の転換」ではないという議論です。基本事実が排水だといえ、簡単に解決することを、有機水銀にこだわるものだから。それは原告が技術論にこだわったことが影響していると思います。

新潟は東京大学の宇井純先生が特別補佐人なんです。工場内の設備からどうやって流れ出るのか、人体の到達まで新潟の弁護士はきちんと技術的にやったわけです。その準備書面がでて戒能通孝先生が『法律時報』で褒め称えた。だから技術論をやるのが当然だという前提にたっている。根本的な間違いは、原因物質は有機水銀だといつて争うもんだから、しないでいい無用な論争、つまり被害者が立証することが根本的に不可能な議論を被害者側がやることになっている。被害者が証明困難な議論をなんでやる必要があるのか。そもそ

も基本の議論が間違っているという点を忘れて、門前まで来ればいい、工場のなかまで入らなくていい、というのはいかにも中途半端な議論、それだったら最初から工場に入らなくていい議論をすればいい、と私は考えています。

公害弁連ではニセ科学論争はやってはならないとルールになっている。やって勝てるわけがない。同じことを原発訴訟の樋口元裁判官が福岡の講演で言っているわけですね。技術論争で被害者が勝てるわけがない。樋口元裁判官は「私に法律論争をしかけてきてもダメですよ。絶対負けませんよ。ごまかし方まで私の方が上です」と。宇井純先生は技術屋だから技術論の必要性を思ったのでしょけれど、裁判官は技術論をそのまま勝たせるわけにはいかないからその判決を書ききれなかった。だから挙証責任の一部を被告に負わせることによって解決したわけですね。それを、法律雑誌まで含めて、みんな褒めたわけですよ。

われわれは「褒めてはいけない」という立場です。議論の前提として間違っている。技術論をやっておいて、うまくいかない部分は会社側に一定責任を負わせればいいなんて。われわれはその意味ではきわめてオーソドックスなわけですね。挙証責任を相手に負わせていいなんていわない。

### 挙証責任と反証責任

われわれが言っているのは、主要事実を裏付ける事実とし

て間接事実がある。主要事実そのものを立証できれば問題ないけど、それは概ね立証できない。ほとんどの事件は間接事実の積み上げで立証責任を果たす、その間接事実の立証を一定程度やった場合、主要事実を立証されたと考えてもいいのではないですか。間接事実を潰す立証を行うことを相手の企業側は立証できるはずだ。間接事実を立証することによって主要事実が推認されるというわれわれの主張を潰すことができる。原告が立証した間接事実を潰す立証をしなさいと。だから反証責任なんです。われわれは挙証責任を尽くした。反論する責任が企業にいつているよ。その反証は企業側ならできる。できないのであれば、われわれが言っていることが正しいことの逆の証明になる。われわれのこの論理の方が法律論として優れていると思いますよ。私たちが勝った裁判は裁判所は乗ってきた事件です。私がやった裁判では、水俣病はもちろんですね。水俣病は汚悪水が主要事実ですから、そのものを立証したと言っているんですけど、チツソの議論にのれば、反証責任が向こうにいつている。一番正面から認めたのは予防接種の福岡高裁判決ですね。近くでいえば、諫早の差し止めを認めた仮処分決定ですね。それから本裁判の開門を認めた佐賀地裁の判決ですね。主要事実の反証責任を相手側に負わした。主要事実の推認を許した。事実上の推認といえます。このわれわれが編み出した実践的な論理展開なんですね。裁判所はこれに乗ろうと思えば乗りやすい。

これ案外、専門家の方でも、理屈上の違いはもちろん十分



わかっていてでしょうけど、実践的な訴訟上の違いをあんまりご理解していただけない。私たちが勝たせようと思ったら裁判所は案外のとってきってくれる。水俣病こそ事実上の推認が働く典型的な事例ですよ。原因物質は工場内でつくられたに決まっているでしょう。違うなら反証しなさい。新潟港内に積んであった農薬が川をさかのぼったというのが昭和電工側の議論ですから、それは否定されたわけですね。農薬が辿りついたわけではない。やっぱり工場内で有機水銀ができたと推認する。何も問題はないと思いますよ。この新潟判決は褒めたたえられましたけど、私は論理的にトリック、ごまかしだと思っています。事実上の推認というわれわれの理屈の方がはるかにはっきりしている。法律論的にもなんの問題もないはずですよ。いかにも大変なことが起きたと持ち上げるのはちょっとおかしいじゃないかと思っています。

### 予防原則

この手の裁判になると予防原則を原告側はみんな主張するわけです。一定の危険性があるものについては安全性の証明を会社がやれ、開発者側がやれ。簡単に言うところこれが予防原則です。これは言ってしまうと「挙証責任の転換」なんですよ。業者側が安全性の証明をしなさいというわけですから。予防原則を採用せよといって争われるけど、私は予防原則は主張としても言葉でも言わない。理由は二つありまして、ひ

とつは主要事実の「挙証責任の転換」という民事訴訟の根本を揺るがすようなことはやってはいけません。根本は守らないといけない。私はその意味で原則主義者です。もうひとつ予防原則というけど、一定の間接事実を積み重ねておいて、それは主要事実そのものを立証したことにはならないけど、少なくとも主要事実が推認はできる。そうしたら企業が反証として否定してこい。挙証責任を最初から企業側が負うといわなくてもよい。われわれにもある程度の努力がいる。われわれも一定の事実を証明したらそれが全部の事実を証明したことにならなくてもあとで推認しましょう。それに反論してきなさい。反論できなければ推認を認めるよ。訴訟技術上もいまの基本の原則にあっている。

もうひとつは、日本の裁判所は予防原則という言葉を用いた瞬間、即座に思考停止です。そんなものは日本の法制度にありません。問答無用です。聞く耳を持たない。裁判所に「聞く耳持たん」といわせるアラジン魔法のランプの言葉は、予防原則と環境権です。これも言うてはならない。環境権といった瞬間、裁判所は即座に思考停止する。同じことを訴訟法的に上手に言いましょうよ、というのが、間接事実の積み重ねによる主要事実の推認、反証責任を相手に負わせる。予防原則の言っていることなんです。こちらが何もしなくておいて相手が立証してこい、というのはそれはいい、横着だよ。少しは努力しましょうや。われわれが危ないと思う事実をこれだけ立証したよ、否定しようと思えばできるはずな

んだから、本当に危なくないのであれば、それをやんなさい。それぐらいの努力はしましょうというのが私の意見です。

われわれは、「諫早干拓工事と漁業被害は因果関係がある、私たちが立証したこの事実で推認できますよね」と主張立証した。佐賀の仮処分と本訴訟の裁判所はそうだと推認できると。きちんと立証するためには、開門調査をやればすぐに立証できるのに、国側がやらないから立証妨害までしているといったわけですね。それで国がカンカンに怒って、そこを執拗に争うことになった。立証妨害までやっているかという争点にしたら、争点がずれちゃいますもんね。福岡高裁は、裁判官がなかなか立派な方だったんで、そうではなくて「主要事実の立証ができています」といつて勝たせた。私たちもそう思っていたけど、裁判所が認めるまでは思っていなかった。

余談ですけど、われわれは福岡高裁で、証人申請で私たちの立証を固めようとしたわけですね。裁判長は証人申請を却下した。われわれは直ちに忌避。忌避理由をその場で言わないといけない。事前にもちろん用意していた。堀事務局長が忌避理由について説明するとやり出したら、裁判長が「もう却下。忌避理由も聞く必要ありません」。われわれも茫然とした。堀弁護士は「せめて理由ぐらい聞いてくださいよ」。裁判長が「引き延ばしに決まっているから却下」と。われわれもそれ以上は追及しなかった。判決はわれわれの大勝でしょう。あとであのとき裁判官たち部屋に帰って「あの原告

のバカな弁護士たちが。もう充分でこれ以上聴かんでいいといっているのを理解しないで」とだいぶ笑ったと思う。このような話はさらに余談があつて、筑豊の産廃処分場で仮処分で止めて、その決定に基づいて福岡県に撤去を求めたら、撤去しない。有毒物質を出しているから撤去しろといつて、県に義務付け訴訟をやったら、その裁判で飯塚の一番で負けて、高裁でこの裁判官たちにあたつた。撤去の義務付けを認めたらんですよ。最高裁もそのまま認めたから、やっぱりきちんとした裁判官だった。おそらく行政の作為の義務付けを認めたはじめての事例ではないでしょうか。

われわれの確定判決は、首相が菅直人さんだから最高裁に行きませんでしたけど、最高裁に行っても勝てた。結果的に行かないで確定させたのが正しかったと思つていますけどね。水俣病でも私たちが二次訴訟の地裁、高裁判決で病像で勝つたときも国は従わない。従わない理由として、学者その他から言われるのが、最高裁まで行かなかったからだ、なんで最高裁判決をとらなかつたのか、という非難の声がいつせいにあがつた。最高裁まで行っても国は聞きはしませんよ。諫早でも高裁で確定せずに最高裁に行っても勝つてたんじゃないかなとも思いますよ。だけど最高裁に行ったら開門できたかといったらできませんよ。また理屈をつけて、どうせ開門をしない。同じことですよ。それは私が想像で言っているわけではない。水俣病がそうでしょうが。そのあと病像で最高裁判決がでも従いませんよ。最高裁判決がないからとい

うのは、間違っていた。特に学者はこの判断を間違っているとは思いません。

### ネコ実験

予見可能性の問題として、予見の対象は有機水銀による水俣病の発生ではない。ただ判決はそう認定してしまった。一次訴訟判決は有機水銀が原因物質であることがわかったという認定をしているけど、若干認定の仕方に問題があります。チツソが高裁に行かなかったからよかったですけど、その点を絞って高裁で争ったら、その点は認められたかもしれないね。有機水銀であることがわかっていたという認定が覆ったかもしれない。わかったはずだはいいですよ。ただそれをわれわれの主張の本体にしていない。

チツソは水俣病について故意犯かどうかという議論をマスコミのひとたちはしたがって、特集記事を組むからといって、私の意見を聞きに来られたこともある。有機水銀で故意犯だったのか。私はそうだとは思いますが、われわれは証明したと思いますけど、本当に証明できているのかというと、若干問題がないわけではない。推認なんですよね。推認であることは間違いないわけです。しかし直接の証拠があるかといわれると難しい。そうするとチツソが故意犯で水俣病の発病がわかっていのにあえてやったというところの「あえて」は何なのか。それが汚悪水論です。汚悪水論だったら

あえてやっただけに決まっている。チツソ排水以外の原因をチツソは言えないわけですから。チツソ排水のなかのこの物質が違うという反論しかできない。チツソが犯人だと、しかもチツソの排水が原因だとはわかっていて、認めていた。だって違うという反論はしていません。チツソがした反論は原因物質がセレンではない、タリウムではない、マンガンではない、有機水銀ではない、としましたけど、自分の排水ではないという反論はついに一度もしていないですもんね。だから故意犯だつていいんじゃないですかということですけど、汚悪水論ではマスコミは面白くない。だからどうしても有機水銀でないと気が済まない。細川証言でそれははっきりしたといわ

ない。細川証言の評価を言っておきますと、ネコ実験でアセトアルデヒド排水であると突き止めた四〇〇号の実験を強調するわけですね。われわれの見解はそれでいいんだけど、論理の組み立てが間違っています。ネコ実験は九〇〇匹の実験をやっているわけですね。細川先生は疫学的にきちんとやろうとされた。まずチツソ排水だというのははっきりさせる。はつきりしたわけですよ。それも排水溝に近いところから順繰りに魚介を取っていくわけですね。それを食べさせていくわけです。近いところほど早く発病する、重症になる。遠くなるほど症状がでるのが遅い、というのではつきりする。まず距離と地域のネコ実験をやっている。もちろん魚の種類でもやっている。出かたの早い遅いはあるけれど、種類に関係

ない。排水だというのはとつくの昔にわかつている。排水のなかのどれなのか。

ネコ三七四号と言うのですけど、われわれが強調した猫です。一般的な議論ではほとんどでてこない。われわれが発見して強調した猫です。全排水、排水全部をネコの餌にかけて食べさせたわけです。発病するんですよ。但し、典型的な水俣病の症状ではない。後ろ足が麻痺した。ただ、全工場排水をネコの餌にかけて食べさせて発病した。水俣病そのものと言えるかどうかは問題にしても、やっぱり工場排水だと細川先生はそう思った。次は工場ごとの排水に分けようと思いませんね。結局、水銀だと、水銀を使っている工場が二つある。それがビニール工場とアセトアルデヒドの二工場ですよ。当然のことながらこの二工場の排水をネコの餌にかけますよね。それが三九八号と四〇〇号です。三九八号が塩化ビニール、四〇〇号がアセトアルデヒドです。それで四〇〇号が発病するわけです。四〇〇号が発病して有機水銀だとわかったと、みなさんおとしやるけど、積み重ねがあるんですよ、積み重ねを押さえないと四〇〇号の意味がわかりませんよ、というのがわれわれの意見です。四〇〇号だとわかったというためには三九八号と対比しないといけない、その前に三七四号があった。この三つがそろってはじめてアセトアルデヒド工場排水説が確定した。そのなかの何かといわれたら、塩化ビニールの方ではない、アセトアルデヒドの方では出た、だから有機水銀となる。ただ、塩化ビニールだって有機水銀は

ありますからね。本当にいうと有機水銀が特定できたのかは問題なんです。私が言うようにアセトアルデヒド工場排水まで特定できたのが四〇〇号だと。それ以後は故意犯に決まっている。

チッソの技術論が好きな人たちがそういう細かい議論をやらない。必ずしも資料をきちんと追っていない。われわれはネコ実験を徹底して追いました。だから三七四号を発見している。立証の上では四〇〇号は面白いけど、だからそれだけでどうしたということです。それが決め手ではない。いかにも四〇〇号が決め手のように世間一般強調されるものだから、われわれはそれに無条件では乗れない。もちろん細川先生自身四〇〇号で決定打ではなく、その後さらにアセトアルデヒド、酢酸工場排水のネコ実験を続けていきます。私たちはもっと全体を見よう。排水によって地域全体が汚染されていく。同じ議論でそれが湾外に広がっていったときの議論もわれわれのものの考え方でないと上手くいかない。水俣湾内の汚染ではなくて、不知火海全域の汚染まで考えるべきである。細川先生のネコ実験はそこまで実験を続けることを見据えていたと私は確信しています。

具体的な例は有機水銀の汚染度です。一層問題になりますけど、汚染地域を限定しますよね。国、チッソは、それを超えた地域には患者はいないという。いやいや、いますよ。そのひとつの根拠は、たとえばハモが京都の市場で水銀の規制値を超えているとひっかかる。どこの魚だといったら天草だ。

漁は同じ場所で行っている。揚げた港が水俣なのか、天草の港なのか。もちろん魚が回遊するという話が根本にある。同じ場所ですら同じ水銀量がでてくるのはある意味当たり前ですよ。どうしても水銀量と魚の漁の場所というのは、現実を見ないで、漁業権の範囲内で国は形式的議論をしようとするわけですね。水銀汚染がどこまでいつているのかという本当の調査はされていない。漁業権の範囲内できつていく。天草では水俣病患者はいない。排水の方がわかりやすい。有機水銀だとどうしても水銀量を立証しろという話になりかねない。

大気汚染をやってきた弁護士は自分たちがやってきて元気がいいもんだから、立証するという。水銀量を数字で立証をやるうかと。大気汚染はかなりやった。細川先生が順繰りに湾内の場所をずっと外へ向かってやった。しかし本当に疫学として厳密に数値をとったわけではない。だから疫学的手法、疫学的ものの考え方です。それを本当に疫学でやるうと思っただら。電磁波で議論しかけたけどとてもではないができない。疫学としてきちんと数字をそろえるにはカネとひとがいる。水俣も藤野先生以下がそれなりに立証している。疫学的、悉皆調査でひとつの島の調査、水銀汚染がない地域と悉皆調査をやった両方比べている。疫学的手法であって、学問的に言う疫学でやるうとしたら条件をもっときつちり細かくやらなといけない。やれないですよ。それでも疫学の考え方で証明できる。話が横道にそれたけど、汚悪水論がひとつのポ

イントだった。

判決がその認定を有機水銀で議論したというのは間違いで、判決の結論は、「被告工場が全国有数の技術と設備を誇る合成化学工場であったのだから、その排水を工場外に放流するにあたっては常に文献調査はもとよりのこと、その水質の分析をおこない、危険物質混入の有無を調査検討し、その安全を確認する。その先の地形、環境全体の変動に注目せよ」ということで、排水が原因物質だということは認めている。ただ環境調査、その他をきちんとやれというのはわれわれも主張している。

## 民法七〇九条

その責任なんですけど、「その排水の放流は、被告の企業活動そのものであって、代表機関がその職務を行う上で他人に損害を与えたり、あるいは雇われているひとが使用者の事業執行にあたり、第三者に損害を与えたときに、特定のひとの不法行為について、法人すなわち使用者が責任を負うべき場合とはその本質を異にする。だから民法七一条ではなくて、民法七〇九条によって責任を負え」。つまり、会社が悪いことをやった。雇われたひと個人が悪いことをやったわけではない。

法律家は普通七一条でやりますからね。七〇九条は加害行為を直接やったひと、七一条は加害行為をやったひとを

雇った企業が責任を負う。国賠法は七一五条だと言われている。要するに公務員が悪いことをやってその責任は国が負う。七一五条と同じ構造だというのが普通の法律家の説明です。われわれは国の責任を問うのは七〇九条だと。つまり国が悪いことをやった。だから公務員が悪いことをやったというけど、それは特定の公務員を言っているわけではない。もちろん言っている場合もあるのは否定しませんが。ただそれだけではない。国相手の裁判をやると必ず国は「公務員を特定せよ」という。われわれは「そんな馬鹿な」。裁判所も国の主張に「そうだそうだ」という。予防接種のときも先に行けないもんだから、「わかったわかった。公務員は厚生大臣だ。文句なからう」と。残留孤児の場合は、ひとつの省の省の大臣といえないから、「公務員は内閣だ」としかいわざるをえない。やっぱり悪いことをしたのは、法人そのもののなか、それともその中の雇われている社長工場長なのか。違うでしょう、チツソが全体として悪いことをやった。この考え方を裁判所が認めた。特定の被用者じゃないよね。七〇九条なんだ。七〇九条で責任を認めたということは案外強調されない。これはそのまま国になりますから、国が悪いことをする。特定の公務員じゃないよ。予防接種が一番わかりやすい。最初が予防接種をした医者相手に裁判を起こした。これが一番矮小化した例です。違うでしょうが、接種した医者の責任じゃないよね。この場合は厚生大臣の責任で、まだ特定できませんけどね。内閣全体でやった場合、産業政策そのものであると

いった場合は、特定の大臣とは言えないですよ。内閣全体、国そのものとかいいようがない。代位責任という言い方をしますが、企業なりに国なりに代位責任がある場合もあることをもちろん否定しませんが、それ以外の場合がない。国自体が悪いことはしない、そんなバカな。昔絶対王政の時代、「王は悪をなさず」と法格言で言った国はまだ「国自体は悪いことはしない」でがんばっている。水俣病で企業自体が悪いことをしない。そんなバカな。企業自体が悪いことをした、ということ突破した。国の責任でもわれわれは突破したと思っているわけです。筑豊じん肺で国の産業政策、国自体が悪いことをしたと事実認定されている。

チツソの責任は七〇九条であるというのは水俣病第一次訴訟の判決です。有機水銀が原因だとはそのときは言わなかった、言えなかったというのが正解です。判決の四〇〇号の議論も有機水銀かどうかではない。「アセトアルデヒド排水による投与実験」です。だからアセトアルデヒド排水による直接投与実験を打ち切らせたことが問題であると。有機水銀解明ではない。われわれの主張がそうだから裁判所もわれわれの主張に乗っているわけですね。

### 地域全体の課題

末梢神経障害を受けている患者はボタンかけができない。入浴の場合も風呂の温度がわからない。湯舟を高くすると入



れないですよ。だからなるべく高くしたくない。しかし、洗い場と湯舟を同じ高さにとまた問題がある。もちろん段差をつくらないというのは当然のルールです。被害者が生活できるような家の設計構図を考えるのは当たり前のことで、それにふさわしい家の構造、たとえば車いすで生活できるように家の構造、それを造る費用は当然損害に含まれるという問題提起ね。これは水俣病でやった。カネミ油症でもやった。水俣病では街づくりの問題だということを主張した。つまり段差をできるだけ少なくするのは家の中の話ですよ。街に出たら車いすの患者は道の段差に困りますよね。水俣病患者がたくさんいるという前提になった水俣市の構造、当然のことながら公共施設の構造までわれわれは問題提起した。

カネミ油症の被害について今の議論をまとめた私の論文を『法律時報』でみた私と同期の裁判官は、「理屈はわかるけど、そんなものは認められないよね」。しかしそんなに時間がたたないうちに交通事故で認めましたもんね。交通事故で家の改造費を認めますもんね。車いすに乗ることになったら、バリアフリーで認めるのが当たり前になった。だから地域社会の問題ということを強調する意味ですけど、それは水俣病固有の問題で発生しているわけだけど、それは普遍的な課題です。身体に不自由な方の固有の問題ではなく市民生活の普遍的な問題としてとらえようと。地域で解決すべき問題、水俣病ではない他の患者さんや高齢者がいるよ、という問題提起です。それはすなわち街の構造自体が問題になりませんか。

わざわざ京都の西山先生、都市工学の先生たちに水俣病患者たちの家の設計図をつくってもらった。勝手に学者に作ってもらって大工さんが作業できないのも困るので、実務家である大工さんができないといえは話にならないので、建築労組、大工さんの組合と一緒に共同討議してもらって、基本的に設計図に基づいて改良した家が水俣にいっぱいありますよ。いまでも建築労組は水俣病に取り組む人々の中心ですよ。それがじん肺に参考になる。なるべく段差をつくらないようにというのは結構できています。

## イタイイタイ病

人体被害とは何かという考え方のひとつのパターンだと思いますけど、病気というのは多原因で起きる。一番単純な考え方だと、いつも私が例にあげるのは、結核の原因は何か。結核菌ですと普通答える。でもそれは本当に答えたことになりませんよ、というのが私たちのものの考え方です。結核菌に感染したひとは、日本国民でいうと陽性反応を示すのは九割はいる。みんな発病しているかというと発病していませんよね。結核菌が原因だと言っても答えたことにならない。大阪大学の公衆衛生の先生が予防接種で証言していただいた。結核菌が前提にあるのは間違いないんだけど、結核菌に触れる機会があったひとで、かつ症状がでるのはプラスアルファの原因があるわけですよ。だから病気の原因は多原因、た

くさんの原因が積み重なって起きると考えるのが正しい。公害の汚染物質も負荷がかかったけど、その負荷のかかり方、同じ負荷なら同じ病像になるかというと、他の条件とのからみでそうはいかない。国側の水俣病の専門家と称するひとたちは、多原因で考えないで、単純に考えるふりをするわけですね。もう少し正確にいうと、国側の専門家は、必ずしも水俣病の専門家ではなく、他の原因の専門家です。つまり、他の原因を見つけたら、水俣病を否定する専門家ということになる。一時期、他の病気をみつけて認定を拒否する事例が続出しました。頸椎症であれば水俣病ではない。高齢で一定の運動機能障害がでると水俣病ではない。否定するのを目的に考えて言っている。

逆に同じ汚染負荷量でも若いうちは症状が出ていなくても、加齢で症状が出る。みんな同じ汚染量があったとする。一定の持病があったために症状が出たひと、一定の持病があったんだけどそれだけでは発病しなかった、そこに加齢がきたひと、別に持病がなかったんだけど加齢が深刻にきて発病したひと、持病があつて汚染のつたら発病したひと。同じ汚染で発病する人と発病しないひとがいる。特に加齢によつて発病がきたひとは汚染が原因ではないというのはおかしいでしょう、という考え方ですね。

一番わかりやすいのがイタイイタイ病なんです。イタイイタイ病で最初に激烈な症状を示したひとたちには特徴があつて全部経産婦です。子どもを産んだことがある女性です。痛

い痛い泣き叫んだ患者さん方は、みんな出産を経験した女性です。だから加害企業は、三井金属ですけど、裁判で出産が原因だと主張した。加齢が原因だというのが同じものと考え方ですよ。出産が原因だと主張したことは、あとで裁判所から判決で厳しく批判されています。自然の営みをもって原因とすることはできない。出産するということは人間の普通の自然の営みである。それが原因になると認められることはない。汚染物質が原因に決まっている。カドミウムとカルシウムの構造が似ている。だから骨の中からカルシウムが抜けて、かわりにカドミウムが入るとカルシウムの強さがないので、骨がボキボキ折れる。痛い痛い泣き叫ぶ。寝返りをうただけで骨が折れるという話になる。カドミウムがカルシウムに一番多量にとつてかわる現象が出産なんです。胎児に自分のカルシウムを与えるとは不足する。カルシウムがなくなつたところにカドミウムがどつと入ってくる。骨の強さがないからボキボキ折れる。わかりやすい図式でいうとそういうことなんです。イタイイタイ病の最初の争点です。企業というのは恐ろしいことを何でも言うものだと思えますよね。出産が原因だというのはおかしいだろう。これは言い易い。ただ加齢だというと、実は同じ論理構造なんですけど、もつともなように聞かえてくるわけですね。イタイイタイ病の判決並みに言くと、加齢というのは自然な現象なんです。から、自然の現象をもって原因だということはできない、というのが正しい判断だと思います。同じ汚染の負荷がかかって

いるという前提ですね。同じ汚染負荷がかかっていたら、症状が出るひとと出ていない人の差がある。他の原因を原因だといっているといけない。その原因が自然現象であればですね。国側とわれわれ側と決定的に対立している考え方です。国はいまだにその考え方を改めません。水俣病だけでなく、病氣一般、とりわけ労災認定の場面ですね。労災認定の考え方を絶対改めようとしません。

#### 四日市公害

大気汚染が比較的わかりやすかった。汚染負荷が同じというのは大気汚染は言い易い。呼吸はみんなしているわけだから。水俣病で魚を食べたということになると必ずしも全員とは言えない。そのなかでも一生懸命言ったのは、家庭内、同居家族だったら同じ量を食べたんじゃないか。同じ食事をしてるわけだから、少なくとも推定は働く。差があってもたくさんの差はないよね。同居家族に認定患者がいるという条件ですね。認定家族がいればあとの家族も当然、発病するに足りる同じ汚染を受けているという推認が働くという話になるわけです。だから大気汚染で一番問題にしたのは、喘息患者というのは必ずその地域にいるはずだ。喘息患者を大気汚染の公害患者と認定するとき、もともといる喘息患者はどうなるのか、というのが水俣での私たちの一番の疑問だったわけですね。

われわれは四日市の認定審査会の会長のお医者さんに証言してもらった。同じ汚染負荷がかかっているのだから、発病する、発病しないというのは他の条件、つまり喘息をもっているひとと同じ汚染負荷がかかっているわけだから、その喘息はもともとあった喘息にプラスして症状がより悪くなっていると判断しますよ。原因を否定する理由にはなりませんよね。もともと喘息があつたひとが汚染負荷を受けたらそれは症状に影響を受けないと考えること自体おかしい。当然同じ影響を受けている。非常に明快です。

認定審査会の会長さんの証言は、非常に勉強になった。今度は負荷量が違った場合どう考えるのか、という質問になる。チツソの代理人が、反対尋問で聞いた。「水俣の魚一匹を食べてもいけないのですか」、先生は「そうです」と答える。私たちはどよめくわけですけど。たとえ話で、家一軒に小石をひとつ投げる。外側の障子の隅が石一個分破れたと考えてください。家全体の機能としてどこか問題が起きたか、起きていない。障子が破れたというのは事実です。一匹だつて影響を受けたというのは間違いないですよ。それだけの細胞が死んだということです。裁判所も納得されたんだと思います。判決に反映されているからですね。汚染負荷の量が違つてもその量に応じた影響は等しく受ける。それがどういう形で外に出て来るかは他の条件との絡みです。疫学的なものの方だと思っています。「的」をつけますけどね。学問としての疫学そのものじゃないかもしれんですけど。

いまは公害として問題がいっぱいあるわけじゃありませんから、労災のときのものの考え方として私は基本に据えるべきだと思います。同じ職場で働いているのならば同じ影響を受けている。それはその企業、固有の問題ではなくて、よその職場の同種企業も同じ影響を受けていると考えるべきですよ。労災職業病の認定というのは、当然それを前提にもの考えるべきである。一人の労働者対勤めている企業との関係とは思ってはいけません。水俣病の病気の考え方のひとつの教訓だと思いますよね。

### ハンター・ラッセル症候群

次の教訓は、原因物質が有機水銀だというものの考え方です。われわれは違うというふうに思います。法律論では、原因はチツソの排水であり、排水を排出する行為が加害行為である。汚害水論を法律論の中心に据えた。まず事実の問題として、チツソは有機水銀を選んで流したわけではない。ありとあらゆる毒を流していますよ。工場内のありとあらゆる毒が流れている。水俣病の発病の機序が魚の体内に蓄積されて、小さい魚から大きな魚に移って食物連鎖した特異な現象だといわれますけど、私は決してそのこと自体が特異だとは思わない。それは普通の生活で当たり前でしょう。職場で直接吸入したという労災の場合は、途中の経過はより少ないと思います。排水から食物連鎖というのが一番経過が複雑だろうと

思いますけど、原因物質がひとつだけで、そのひとつだけが人体に影響を与えたと思うのはあんまり単純すぎる。チツソはありとあらゆる毒を流しているわけだから、そうすると流したありとあらゆる毒が魚に溜まっている。だから、チツソが流したありとあらゆる毒が人間に影響を与えていると思うのが当たり前で、有機水銀だけが影響を与えたわけではない。原因物質が次々と変遷しました。セレン、タリウム、マンガンと変遷した理由があつた。それぞれが毒物として人体に影響を与えている。チツソはそれを流している。魚の体内にも当然あつた。猫にもあつた。人間はそれを接取している。だから原因だと思つた。だからセレンが否定されたからといって、人体が接取したことは否定されていませんから。セレンが害を与えていないことはない。有機水銀がより被害を与えたというのが正確ですね。それが有機水銀であつたという話です。

大気中にも毒物を排出している。水俣の工場周辺にいるひとは当然大気汚染の影響も受けている。地域として私が強調して言うのは、当然、ひとつの物質で被害を受けたというわけではない。それは法律論として汚害水論は正しいと思つていますけど、自然科学としても汚害水論は正しいに決まっている。有機水銀だけを原因物質だと断定するのは科学的に正しくないと思います。当時、複合多重汚染という言葉が流行りましたよね。自然科学的に極めて正しい考え方だと私は思っています。だから原因物質をひとつに特定して症状を合

わせようとするのは、ベットの大きさにあわせて寝る人の足を切断するようなもので他の物質の影響を否定する論理だと思っています。正しい病像には辿り着かない。だから、認定審査会が水俣病の患者を切り捨てる論理は、ひとつは他の病気を見つけて否定する。その前にそもそも有機水銀の特定の症状しか拾わない。有機水銀の症状とは何かというと、魚の体内に蓄積濃縮されて入ってきた病像を捕まえるべきなのだが、そうではなくて認定審査会がいった症状、ハンター・ラッセル症候群と言われるものはまさに労災の有機水銀をつくっている製造工場の労働者が吸い込んだ病気ですもんね。だから水俣病とは全然違うんですよ。発生機序もね。純粹な有機水銀をつくっている工場ですから、それも大気中から吸入して発病した患者と水俣病の患者を同じ症状認定しようというのは、それは極めて非科学的だと私なんかは思いますよ。なんで国の専門家といわれる有名な先生方が科学的だとおっしゃるか。私の理解を越えます。そんな専門家とは何なんだろうかと率直に思います。

### 悉皆調査

だから原田正純先生が「水俣病の前に水俣病はなかった。教科書はない。目の前の患者さんを見るほかない」とおっしゃる。現地の実際の患者で水俣病とは何かを明らかにするしかないというのは、私は極めて正しいと思いますね。予見可能

性の問題で、「水俣病の前に水俣病はあった」という論文をエコノミストにお書きになった弁護士団の一員がいらっしゃるけれど、水俣病の前に水俣病があったわけではない。水俣病の前に水俣病と類似の病気があった、と言うべきですよね。ハンター・ラッセル症候群のハンター・ラッセルなどがみつけた患者たちは決して水俣病ではない。有機水銀中毒の患者ではあるけれども。そこを分けて考えようという専門家は何なんなのだろうかと思います。水俣病患者がもっている症状とは何か。それは現地で調べる以外にない。悉皆調査ですよね。悉皆調査をやればわかりますよ。

そんなに大がかりにやらなくても、熊大が第二次研究班、正確には「十年後の水俣病研究班」が、公式報告から十年間経過した後の水俣病の実態調査を熊大の各専門教室が協力してやった。非常に面白い研究成果が出ているわけです。強い汚染による重症患者と一定の微量の長期による患者と症状が違ってくるという研究もでてくるわけですね。微量でも長期になると発病するよ。その研究のなかで注目すべきは、有機水銀が有機水銀になることはない、とその筋の専門家から強く主張されていた。なぜ無機水銀しか使っていないのに、有機水銀になるのか。まず工場の中で変化する。具体的な実例として主力製品として酢酸ビニールというのがある。アセトアルデヒドを原料として塩化ビニールをつくる。その製造工程中、管が詰まってしまう。それが酢酸ビニールだった。つまり、チソは酢酸ビニールを意図せずにつくった。それを

商品化して売り出す。チッソの内輪話として、社内報で書いてある。化学工場では全然珍しい話ではない。目的の製造工程をやっていたら知らないものがでてくる。それが良い商品価値があるものだった。ごく普通に起きる話だと。それはそうだろうねと思います。

工場内の製造工程過程で有機水銀化するというのは別に珍しい話ではない。さらに無機水銀を排出したら自然界で有機水銀化するのか、という問題があつて、それを熊大は見つけたわけです。無機水銀が自然界で条件次第によつて有機水銀化するという報告ができました。但し、微量です。その時の学者の研究成果だと、その微量は蓄積濃縮して発病可能な量になる、というところが味噌です。十年後の水俣病研究班はそう言っている。ただまったく無視されていますけど。その研究が意味をもつのは、その微量が発病可能な量だという過程がひとつあるわけですね。国はそれを絶対に認めません。だからチッソが流した無機水銀が自然界で有機水銀化しても発病可能な量ではない。長期にわたる微量な蓄積によつて一定の症状がでる。急性劇症とはまったく違う。慢性とも違う。それがなぜ水俣病といえるのか。悉皆調査のなかで一定割合を占める人たちです。有意に差がでる症状がでる。その調査をやらないと水俣病の症状とはならない。国は絶対にやらない。自治体もやらない。

県民会議医師団だけが少ない地域ですけど悉皆調査をやつてみせた。九〇パーセント以上の住民で調査をしている。そ

の積み重ねが水俣病県民会議医師団の水俣病の病像です。これが裁判で水俣病の二次訴訟、病像を争つた裁判ですけど、三次訴訟の一陣二陣で、認定された水俣病像、それから最高裁で認定された、我々の弁護士団ではありません、違う弁護士団がやつた裁判ですけど、基本的には県民会議医師団の病像です。最高裁で認められている病像ですね。それぞれ微妙な差がありますけど、基本は同じです。いままでは水俣病の県民会議医師団の病像はある意味では不敗、敗れたことがなかった。大きな人数のうちの少ない何人が否定されたことはあつた。それは個別事例で否定されたので、基本が否定されたわけではなかった。今回、初めて福岡高裁で全員否定されました。これは初めての事例です。びっくり仰天です。県民会議医師団の考え方が否定されたと考えるべきことも知れません。ゆゆしき事態です。

その原因をどう考えるのか。弁護士が悪いのか、裁判所が悪いのか、結局はそういう議論になりますね。私は両方悪いと思います。両方というのは、歯に衣着せずにありますと、同じ現象が原発の避難者訴訟が福岡地裁で起きたわけですね。国の責任が否定される。われわれはいままで国に対しては他の裁判で連戦連勝だと思っていましたから、まさか福岡で負けるとは思っていなかった。他人の話ではなく、私どもも他の訴訟で福岡高裁、福岡地裁で負け続けている。負けた時に司法反動だというセリフは一番嫌いなんです。裁判所が悪いから負けたと弁護士が言い出したら絶対勝てないとい



うことです。それをいったらおしまいという意見ですけれど、ただこのところあんまり酷すぎる。福岡地裁、福岡高裁がおかしいのではないか、という判決事例が続出している。おかしいと自信をもっているのは、諫早の裁判で漁業権の期間十年で福岡高裁で私たちが負けさせられた。これが最高裁で厳しく非難された。違法な判断だと。やっぱり福岡高裁間違っていたよね、おかしいよね、という例が重なりすぎている。もちろん、私たちが言っているのが全部正しいとは言わない。しかしそれにしても負けさせ方があまりにも乱暴すぎると思う。水俣病の例でも全員否定はないだろうと率直に思いますよね。全員負けるのは異常事態ですね。ものの考え方自体がやっぱりおかしくなっている。それはわれわれが公害裁判の歴史で作りに上げてきたものを否定する考え方だと思っているものだから、ある意味で危機感があります。

### 駅弁論争

食中毒事件で考えれば、行政だってちゃんと必要な行政措置をとっている。それがわれわれの駅弁論争です。駅弁で食中毒がでた。何が原因かはわからない。しかしこの会社の駅弁だとはわかっていて。食品行政は、その会社の駅弁を全部販売停止にしますよ。この会社の弁当のどのおかずか、そのおかずの中のどの菌か特定されるまでは、わからなければ販売許すなんてバカなことはない。その販売禁止を誰も疑わ

ない。なぜ工場の排水となると当たり前でなくなるのか。水俣病は湾内の魚で起こっている。魚を規制するというのは、食中毒行政では当たり前である。「水俣湾内の全魚が有毒化している証拠を示せ」と国は言った。横車に決まっている。駅弁の販売中止と比べると水俣病の異常さがとてもよくわかる。原因物質が特定されるまでは規制できないということはやらないという行政の意思表示です。やらないということを別の言葉で説明しているだけです。

水俣病を防ぐためには排水規制しておけばよかった。排水規制したら全部の工場の操業を停止しなければならぬという反論になった。全工場止めたらだけのひとりの生活被害がでるのか、という議論にすり替えられた。本当は何も全工場を止める必要はなかった。特にネコ実験のあとでは、水銀工場の排水を止めればよかっただけの話ですから、全体に与える影響はそんなに大変な影響ではなかった。国やチンソにはやる気がなかった、ということにすぎません。

汚水水論のものの考え方というのは、被害を防ぐという観点からいえば非常に重要な視点です。「原因物質を特定して来い」という考え方は、被害拡大を生むものの考え方、つまり被害の発生を認めながら工場操業を許すものの考え方なんですよね。だからよく私が議論が極端だと思うのは、被害を防ぎたいという人の議論は予防原則となる。議論が飛びすぎだろう。いまの議論は予防原則という言葉を使う必要はない。予防原則という網をかけないでも、原因を細かくしなくても、

特に化学工場で有害な排水がでるよね。それを予防原則という言葉で説明しなくたって、と私なんかは思いますね。工場排水が危険かどうか。漁民の生け簀の魚が海のなかに流された排水のなかで死ぬよ。水俣湾内は公海ですから、チッソの工場の範囲をとくに離れている、許されない事態であることは明らかでしょう。原因物質の特定がいるというのは詭弁に決まっていますよね。

### 因果関係

次に因果関係の話になるわけですけど、原因物質は、大きくとらえた物質、別に原因物質の特定はいらない。これはじん肺の裁判で弁論したんですが、国や企業の主張では粉じんにも良い粉じんと悪い粉じんがある。粉じんのなかでも特定の大きさ、特定の性質をもった粉じんだけがじん肺を起こす。石炭を掘っていたら坑内の粉じんがじん肺を起こすに決まっていると主張すると、いや、良い粉じんと悪い粉じんがあります。粉じんのなかのどの粉じんが原因なのかと特定せよといってくる。粉じんではダメだ、と。いま、PM<sub>2.5</sub>も酷い議論だと思えますよ。特に被害が重いよというのならわかりますよ。他の粉じんが良いかのごとく言われるとそれはない。

昔の人は偉かった、とよく言います。法律の勉強をするときに最初に信玄公旗掛松事件という話が出てくる。信玄公が

茶店で休んだとき、旗指物を掛けた松が残っていた。茶店の看板になっていた。それを売り物に茶店が流行っていた。その横に鉄道をひいた。蒸気機関車が排煙を猛烈にはく。松が枯れてしまった。茶店のおやじさんは鉄道会社に損害賠償を請求した。当然のことながら文句なしに勝ちますよ。昔の人はみんな偉かったよね。汽車が吐き出す煤煙だけでね、そのなかの物質を特定して来いなんていう議論は誰もしていない。みんな法律の勉強の最初のときに習ったろうが。汽車の煤煙だけで認定したのはおかしいなんていう議論は誰もしないでしょう。バカな議論をいつから始めたのですか。汽車の煤煙で十分だとみんな思っていた。けっして私が特別なことを言っているわけではない。屁理屈に決まっている。細かい議論というのはためにする議論なんですよね。

因果関係は、発生機序まできちんと立証しなければならぬ。それで新潟水俣病が話題になるわけですよ。イタイイタイ病はカドミウムで起きるというのは誰も争わない。経産婦ね、子どもを産んだひとしかならないでしょう、という妙な議論が入ってきて、因果関係が争われた。他の原因が必要なんだよね。だからカドミウムが原因とは必ずしもいえないという変な議論になったわけですよ。水俣病の場合、工場内でどういう過程で有機水銀ができて、しかもそれが魚に貯まって、食べた人間が発病するのか、そんなものわかるわけじゃないですか。反論の方が極めて明快ですよ。それはわからんよね。私どもに協力してくださる専門家の先生から

言えれば、「バカバカしい。蓄積濃縮するということを考えたことがないのか。そうでなければ人間の体はできませんよ。骨ひとつ、食べ物の中の微量なカリシウムが貯まって骨になったわけであって、蓄積濃縮したに決まっているじゃないですか。カタツムリの殻がどうやってできたのかを考えてみたら、蓄積濃縮というのは自然界で日常的に起きている問題なんです。それを水俣病ではじめて知りましたという専門家って何ですかね」という議論になる。

そんなに大げさに議論しないといけないことなんですかね。因果関係って大げさに言うからわけわからんようになるんだけど、なんで水俣病になりましたか。水俣湾の魚を食べたからです。これで十分なんです。水俣湾の魚を食べたからなりました。くだいようですけど、魚の中の何が問題かなんていらん議論でしょう。法律上の因果関係は、要するに加害者がだれかを特定するという作業ですからね。まず被害を明らかにしないといけない。現地で何が起きているのかをちゃんと調べようね。その被害がわかったら、それを生み出している原因は何か、というのが因果関係ですから。水俣湾の魚です。水俣の魚だけでは因果関係はわからないから、加害者チツソまで結びつけるためには、排水です。因果関係はそれで十分じゃないですか。汚悪水論の立場に立つことによって、因果関係もいらん議論がすつ飛ぶわけですよ。

## 排水路変更

排水が原因だということを特定する方法をチツソは人体実験をやった。それが排水路変更です。排水路を百間港に流していたのを変更したわけですね。不知火海側、水俣川河口に流すように変えたわけです。水俣チツソ付属病院の病院長の細川先生の証言が色々あるわけですけど、私が強調するのは、排水路変更に反対したところが重要なんです。ある意味ではこれが一番重要なかもしれません。ネコ実験よりもね。そっちに患者が発生したら大変なことになると。チツソが原因だということは争う余地がなくなるぞと。細川先生はそこまで言って反対された。あつという間に発生したわけですよ。

それが法律論的にも正しいというのが、わが検察がやったわけです。社長と工場長を刑事事件で起訴しましたけど、刑事事件での予見可能性と因果関係は排水路変更です。排水路変更によって患者が発生した。排水路変更したらこっちに患者が出るぞと。予見可能性があった。現に発生した。だから因果関係としても立証十分、これが刑事事件の認定ですからね。われわれ汚悪水論を民事訴訟で強力に言いましたが、それを正面から文句なしに認めているのが刑事事件の判決なんです。

だから因果関係は排水路変更でもいいわけですよ。もちろんネコ実験も因果関係の証明です。さらにいいですよ、チツソは過失犯か故意犯かという議論は、汚悪水論に立てば故意

犯に決まっています。一〇〇%故意犯です。確定的行為がある。チツソの犯罪の悪質さはつきりさせる意味でもやっぱり汚悪水論です。有機水銀説の議論をしていると東京地裁の判決のようにチツソが有機水銀に迫りつくまでの原因物質を否定してきたのは正しいというバカな議論になってしまいうわけですね。汚悪水論の立場に立てば、それがいかにバカな議論であるのか、つまり排水の中の他の物質を探しているだけです。だから、排水が原因ということとは動いたことにならない、だから反論になっていない。反論になっていないことがわかりきっているのにそれを反論になっているという東京地裁の裁判官のおかしさですね。逆に言うと、原因物質を特定せよという議論の犯罪性ですね。いかに犯罪的な議論か。それに悪乗りする裁判官がいる。私は本当に非常に悪質な議論だと思いますよ。

ということでは因果関係もけっして難しい議論はいらなかった。それをいかに難しい議論があると組み立てて惑わせるのか。しかもそれに裁判官が簡単に悪乗りする。悪乗りだという言葉は正しいと思いますけど。われわれはそれを打ち破ってきたつもりでいたんだけど、結局打ち破られていない。いまでもまだその議論を平然とおこなうわけですね。裁判所でも疑問をもつひとがなくなっているのではないかと思えますよね。このごろの判決をみていると。

### 判決の順番

四大公害裁判は、順番からいうと、新潟水俣病、イタイイタイ病、四日市、最後がわれわれの順に提訴した。ところが、判決は、イタイイタイ病、新潟、四日市、われわれです。イタイイタイ病は、鉱業法ですから、無過失責任なんです。だからいまの原発の損害賠償の訴訟と同じなんです。イタイイタイ病は、企業の責任である、賠償義務を負っているというのは争いが無い。争われたのは因果関係なんです。因果関係さえ認められれば賠償責任を負うというので一番勝ちやすい。まずイタイイタイ病が最初に判決をとる。次に新潟水俣病で企業の責任、そして四日市で共同不法行為、複数原因企業の問題、そして最後にわれわれの水俣病です。新潟水俣病よりも責任の問題が難しかったのは、新潟水俣病は第二の水俣病ですから、第一の水俣病があったので予見の問題は回避できる。われわれは損害です。それで宮本憲一先生がこの順番で判決をとったのは神の摂理であると評価した。実は私たち内部の議論で文字通り順番を決めた。坂東先生が「自分が最初に判決をとる」といったから、みんなはいかん、と止めた。イタイイタイ病が最初に判決をとるべきだという議論です。

これも私たち、自由法曹団公害弁護の基本的なものの考え方ですけど、裁判が結審する、すなわち判決をとるというのはどういふときなんですか、という問いかけがあるわけで

す。訴訟法的にはそんな問いかけナンセンスで、審理が熟したとき、双方が主張立証責任を尽くしたとき、今の裁判所はそれも無視しますけど。われわれがまだ立証したい、主張も追加しているといつても、そんな議論聞く必要ありませんとおっしゃいますから。いま訴訟法的にもどうかと思うんですけど。訴訟法的には双方が主張立証を終わりましたということです。

われわれの議論はそうではない。確実に勝つと社会的に明らかになって、はつきりいうとマスコミも勝つと言っている、かつ、運動的に最も充実したときです。だから判決では勝てると思っても、運動が充実していなければ結審して判決をとつてはならない。上に行つてひっくり返る。もつと言うと、運動的に最も充実して勝つに決まっているのであれば、上にいかせない、結審して判決をとる以上は上にいかせない、ということとつながるわけですね。あんたこれ以上争つてもダメだろうが、それも運動で押し込める。われわれの結審するときの状況です。その前提として「訴訟指揮は私がする」というのがあるんですけどね。訴訟指揮を裁判官がするのであれば、いまのような議論は何の意味もない。いま、訴訟指揮は裁判所がするというまた基本原点に戻っている。われわれはそれを打ち破つて訴訟指揮をしているつもりでいたんだけど、裁判所からそんな議論聞く必要ありませんと簡単に言われて、結審されているという問題がいま起きている。

われわれが結審するという以上は必ず勝てる、運動的にも

一番盛り上がっている。つまり相手を押し込むことができる。新潟はまだ運動的には充分ではないという議論を自由法曹団がした。自由法曹団で議論して、だいたい坂東先生が抵抗したんだけど、それは富山の方が確実に勝つというのがひとつです。神岡鉦山というのは岐阜県ですから、富山県ではありません。だから富山県はみんな被害者を支援しているわけです。結果的には判決の順番は非常に良かったわけですね。それでもイタイイタイ病だけは控訴された。一番運動が進んでいて、一番強いと思われていたのに。

## 損害論

イタイイタイ病の一審判決は驚くべきことに認定被害金額は五百万ですからね。当時の交通事故の死亡者の強制保険の自賠責の補償金が五百万にあがろうかというとき、まだ五百万になつていなかった。だからいまの二千五百万円ですね。そのあとの新潟水俣病が百万から千万円というランクをつけた。われわれは百万という金額に衝撃を受けた。だって、新潟の水俣に比べれば軽いと言われていたけど、いくら軽くても百万という金額はないだろう。われわれは衝撃を受けたわけです。なにがなんでも高額な損害額をとるぞと、われわれは請求は二千万です。しかもあんまり評価されていませんが、家族の慰謝料は別です。家族は、それぞれ請求したんです。両親とか、子どもさんとか、みんなそれぞれ請求したんです。

よ。二十万のほかに、家族の慰謝料請求がついている。家族が認められた例はいっぱいありますからね。ご両親だったら二千六百万円になる。私の方は損害論を最後にやったわけですが、当時の金額からいうと画期的金額ですよ。当時、昭和三十一年から三十五年にかけての患者さんたちですよ。三池炭鉱の爆発事故の死亡された方は五百万ですもんね。われわれがやった山野炭鉱の爆発事故、昭和四十年の被害者ですけれど千万円を超えていますけれども。炭鉱事故、この当時の事故と比べて、二十万円という金額がいかに大きかったか。

損害立証については、新潟で衝撃を受けたのでずいぶん苦労しました。そのひとつが全員に詳細な診断書をつける。この診断書はものの考え方が根本から違うわけですよ。普通の診断書というのは因果関係を明らかにする。この症状があります、これは水俣病です、という診断書なんです。第一次訴訟は全員認定患者ですから、これが水俣病の症状なんです、と言う必要がなかった。こういう症状がありますと症状をずっと羅列するのが普通の診断書なんですけど、それをしませんでした。こういう障害があります。こういうことができません。それは水俣病の症状があるからです、という診断書ですね。これは珍しいと思います。労災でもなかなかこういう丁寧な診断書を出されていないと思います。もっている症状、医学的な呼び名ではなくて、その結果、生活に何が起きているかという診断書ね。これを全員につけた。県民会議医師団の診断書はそのあとずっと高く評価されて、否定さ

れてこなかった。水俣病三次訴訟第一陣判決は県民会議医師団の一人一人についてその経歴と水俣病の診断の経歴をきちんと認定して、この医師の書いた診断書は正しさが担保されている、と認定されてる、と認定しています。極めて正しい評価だと思います。私は県民会議医師団の診断書は絶対に否定されなと思います。現にいままで否定されなかった。患者をちゃんと見たうえで、しかも症状の羅列ではなく、こういう問題が起きていますという診断書ですから、それは否定されるわけがない。

## フィクションとノンフィクション

われわれ弁護士の方は損害について何をしていたのか。こういうことが起きていますよという具体的にエピソードを積み重ねた。例えばですね、これは水俣病の話ではないですけど、原田正純先生が三池の炭じん爆発の患者さんをずい分見とおられている。先生が話してくださった話のなかで一番衝撃を受けたのは、それこそ五〇代のいい大人が、見たところ何の問題もない身体しっかりして、ものすごく元気なんですけど、行って話を聞いていたら、子どもとテレビのチャンネル争いをした。子どもが見たいというのを、何を言うか、ぼかすと子どもを殴りつけてチャンネルを渡さなかった。衝撃ですよ。子ども同士の喧嘩ですよ。大の大人が子どもと本気になってチャンネル争いをする。見た目まったく問題



もないわけですから、CO中毒の被害がいかに大変かということ私は痛感しましたね。見た目の問題ではない。判断能力が落ちているということ、まともな判断ができない。大人が子どもと本気になってチャネル争いをしないでしよう。まさに子どもの状態なんです。それは見た目では絶対にわからない。少々話をしてもわからない。

そういうエピソードを積み重ねないとわからない。「判断能力が落ちています、脳の後遺障害だからです」と診断書を書きますよね。判断能力が落ちていることを具体的に生活の場でどう現れるのか。本気で子どもを殴りつけてでも、自分が見たい番組を死守するというのは衝撃を受けました。そういうエピソードをいかにきちんと積み重ねるのか、われわれは被害者の陳述書で書いたわけですね。その陳述集が『愛しがる生命を抱きて』というタイトルで出版されている。タイトルは気に入るかもしれませんが、中の話はそういうエピソードがきちんと入っている。

石牟礼道子さんの『苦海浄土』が水俣病の紹介本として高い評価を受けている。私もその評価に対して異論はありません。ただ、書いてあることが事実なのかという点と違いますよ。あそこを書いてあることが、現に水俣に行ったら見れることができると思うたら大間違いです。患者さんの生活はそんなことではありません。あれは石牟礼道子さんが書いたあくまでもフィクションである。ノンフィクション大賞に選ばれたのですが、受賞を辞退されました。だけど、描いてある中身

が真実というか、真理であることはその通りです。まさに文学作品としてみたらすばらしい。水俣病患者の心の実態とか、生活の実態が鮮やかに描きだされているという点はそうだと思います。だから、みなさん、本当に水俣に行けばあの生活があったと思われていますけど、しかしそれは間違いです。そこは違うということがわかった上で正しく評価しないといけないと私はなんか思う。われわれは本当にあることを書く、うね、本当に起きている話を書く、うねと言って書いたつもりです。実際の生活をエピソードを積み上げることによって明らかにした。

あともうひとつ。世間的にはまったく評価されないから一生懸命言って回っているんですけど、ユージン・スミスの写真、とりわけ、智子ちゃんのお母さんが抱いて入浴している写真は話題を呼びますが、胎児性の患者さんを撮った写真は、患者さんたちと弁護団が相談した結果、ユージン・スミスに撮影を依頼した。もちろん、撮った写真は裁判所に出しますよ。裁判所に出すための写真を撮ってほしいと弁護団と患者さんが正式に依頼した。普通だったらはっきり言って入浴シーンなんて撮れるわけがない。後で智子ちゃんのその写真を集めたポスターに使ったんですね。そしたら智子ちゃんのお父さんから使わないでほしいという抗議が来た。その後、ユージン・スミスの一連の写真は、ポスターなどには使わないようになった。

ユージン・スミスが撮った水俣病の一連の写真をテーマに

山口由美さんという人が本を書いた。それが小学館のノンフィクション大賞をとっている。彼女は、報道写真を使うこと、それをダメだということの考え方についての論考というか、ユージン・スミスの活動の紹介と同時にその議論をひとつのテーマにした。面白いテーマであることは間違いない。当然、この写真は何を目的としてなんのために撮られた写真なのか、というのがまずないと、話にならない、と私は思っている。本来裁判所に提出する資料として撮られて、かつ裁判の資料として使われています。裁判所の資料として証拠写真として提出されているものを他のひとが社会的に利用することがどうなのか、もうひとつ大きな問題がでてきます。裁判資料になったんだという点を論点から落とすなら、その欠陥はもう議論の余地はないと私は思いますけど。それを一切触れないで、本当は取材力不足で知らなかったのでしょう、あの著者は。裁判に使われたということを、知って無視したのであれば最初から失格ですよ。知らなかったとしたら取材能力がいかにほどのものなのか。裁判所で使われたかどうかはちよつと取材したらわかることです。

いずれにしても胎児性水俣病患者さんの写真はそれぞれの家族の証拠資料として全部提出されました。当然のことながら、智子ちゃんの入浴の写真も裁判所に記録として出ています。私は裁判所の判断に相当影響を与えていると思います。それぞれの胎児性の患者の生活をしている写真がある。そのうえで各家庭を裁判官が一軒一軒全部回ってもらった。だか

ら原告の話は家で聞いたわけですよ。これも多分前例がない。そのあと、われわれがそれをやったからいくつ裁判例ができましたけど。いまは流行りませんね。何よりも裁判所が乗らない。せいぜい、福島原発でも被害地をまわって、原告の何人かの方の話を聞くというのはありましたけどね。

それでも仙台高裁の生業訴訟の判決には大きな影響を与えていると思います。

裁判所が現場に行つて、直接被害者の話を聞くことの重要性をあらためて強調する必要があると思います。

### 診断能力

私が『法学セミナー』に書いた裁判の報告を渡辺洋三先生が『法とは何か』という岩波新書に引用してくださっていましたけど、高齢の患者さんの入浴する場面を再現しようとしたわけですね。おじいちゃんが患者さんなんですけど、おばあちゃんも体が悪いんですよ。ベッドのところから風呂場まで行つて入浴するというのがいかに大変なことなのか。それを裁判官に見てもらうと、結局やろうとしたんだけどおじいちゃんがベッドから滑り落ちて体勢を立て直すことができません。悪戦苦闘しているときに、チツソの代理人が「もうやめましょう。こんな残酷なことは」と言つたわけです。それでおばあちゃんがかんかんに怒って、「じいちゃん、最後までやらないかん、最後まで」と言つて懸命に努力したけれど結

局でできなかった。二人はベッドにすがって「くやしかね」と泣き崩れたその場面を書いていたのを渡辺洋三先生が引用してくれた。「こんな残酷なこと」とチツソ代理人は言ったけれど、私は「これが毎日毎日繰り返されているのですよ」と書いた。

色んなことを考えつく限りやってみた。患者の実際の診断もお医者さんに全部付いてもらって各家で実際にやってみてもらった。国側の専門家と称するひとたちはおかしいと思う。指先の知覚障害がありますと、針で突くわけですよ。患者がウソを言って痛いを痛くないと言えば、判断がつかないのだと国側の認定審査会の医者が言うわけです。私はこれは恥だと思います。自分に専門家としての能力がないと言っているわけですね。患者さんがウソを言ったら、本当の判断ができないと言っている。自分たちは騙されると。私は専門の医師なら騙されない方法を考えないよ、と思います。

感覚障害でどのような被害がありますか、というエピソードですよ。風呂に入って自分は適温だと思つて入っている。赤ちゃんを入れてくれと娘さんが言うものだから、赤ちゃんを抱いて入れようとしたら、赤ちゃんが泣き叫ぶので、娘さんがすつとんできて、「おじいちゃんなんてことをするのか」。熱湯に赤ちゃんを入れて、自分は全然どうもない、というエピソードはざらにある。

藤野先生と弁護団の面白いやり取りがある。何度ぐらいまでなら実際にさわってみていいのですか。「たんばく質が固

まる、要するに、火傷する温度は七〇度から七二度ぐらいだよ。元談、元談、まあ、四五度ぐらいあれば十分じゃない」というので、お湯の温度四五度で温度計を立てて、湯呑を「裁判官持つてください」と、持たせる。持てませんよ。触れただけで熱い。持ち上げることすらできない。患者さんにごうぞと渡すと平気で持っている。裁判官は、ニセ患者で金欲しさにやれることではない温度であることを自分で触ってわかっています。「置いていいですよ。早く置いてください」と裁判官が催促する。絶対疑いようがない。ニセ患者というのは診察が悪いんです。専門家が専門家としての診察をしていません。

われわれが感銘を受けたのは、藤野先生の先生の立津先生ですけど、精神神経科の教授ですね。立津先生が水俣病患者の診察を現地水俣ですつとしてきた。藤野先生たちがくつついてお供をしていた。立津先生の話は、たとえば運動失調の患者さんで指先で細かい作業ができるかどうか。まず患者さんが診察室に入ってきたときには何をみているか。ひとつは真直ぐ歩けるかどうか。これは誰が考えてもわかる。

怖いエピソードがある。水俣の魚屋さんの組合で集団検診を受けようとわれわれは提案をした。そしたら若手が猛反発して「冗談じゃない。俺たちが水俣病のわけないじゃないか。そんなことをしたら商売あがったんだ」と。組合長は、「逆にはつきりさせようや。そっちの方が商売になる。水俣の魚を売らないとはつきりさせればいい」という意見ね。「そん

なものする必要はない。水俣病のわけがない。やってみせようか」と。若い組合員が畳の縁を歩くわけですね。これが一番簡単な検査なんです。縁どおりにまっすぐ歩けなかったわけですよ。みんなが息をのむわけです。みんなで直ちにその場で検査を受けることを決議されたという有名な話がある。

患者さんが診察室に入ってきて、歩いているのをみている。さらにもっと違うところを見えています。何だかわかりますか。指先が器用かどうか。ちゃんと動くかどうかを見えています。服装です。ボタンが付いていない服を着ている。ボタンが付いているシャツを最初から着ていない。逆に言うと、ボタンが付いている服を着ていたら、「あ、違うな」と推定が働いているわけです。もちろん、ボタンが付いていたら、それを外すとき、どれぐらい器用に外せるのかをしっかりと見ている。原則として着ていない。これぞプロの診察です。やつぱり、患者をどれくらいみてきたのか。

針で突いて、痛い、これでも痛くないのか、血が出るまで突いたという有名な話があるけれども、ナンセンスな議論なんです。痛くないといわれたら判断がつきませんなんて、いかに診察技術が拙劣かということを白状している。それが専門家として恥ずかしい発言だということがわからないぐらい水俣病を知らない、というのが私の評価ですね。国側の認定審査会の医者の発言というのは恥ずかしい発言がとつても多いですよ。ニセ患者発言なんていうのはある意味正直な話ですが、そうではなく専門家として診察技術が問われるよ

うな発言を平気でしている。自分の診察能力を素人同然だと白状していることがわからないぐらいの能力と酷評しますよね。私は立津先生から何をみるのかという話をずいぶん聞きました。

そういうエピソードだと思いますよ。いろんな陳述書を書きますけど、いかにエピソードをきちんと聞けるか、患者さんたちからそのようなエピソードを聞けるかが一番ポイントだと思っています。山野炭鉱の爆発事故のときにも亡くなった遺族の方から当然陳述書をつくるわけですけど、話を聞くとき、五感を働かせる。遺体が鉱内からあがってきたときにCO中毒ですから、頬がピンク色で、遺体がまったく損傷なくものすごく綺麗なんですよね。本当に亡くなっているのか、と思うわけですね。私は、三池の炭じん爆発で坑内に入っていますから、坑内にはいると一番びっくりするのは匂いなんですよね。当然燃えているわけだから。遺体は綺麗なんですけど匂いが付いている。まず匂いのエピソードを聞けど。それから遺体があがってきたときの音。当然騒音なんですけどね。遺体がちょうど坑内からでた瞬間の音。自分の家族を発見したとき騒音が聞こえなくなっているはずだと。自分の夫だとわかったとき、陳述書を書くというのは五感をいかにきちんと聞き出すか、と思いますね。

水俣病でもいろんなケースがある。ある話で、みんなから笑われた。おばあちゃんの患者さんが、当時は荷物を入れる押し車はありませんでしたから、古い乳母車を押して歩い

ている。ギコギコ音がするわけですよ。私は「油でも差ししょうか」と軽く声をかけたわけですよ。「そんなことダメです」。わざと油を差していない。油を差したらすうっと行つて、自分がついていけないで転んでしまう。すうっと行つてはいけない。私は軽率なことを言ったなあ、と反省しました。いかに理解できないかですよ。見た目だけでは理解できない。身体を預けて一步一步、ある程度抵抗してもらわないといけない。その感覚がわからないんですよ。聞いたらなるほどねって。ギコギコ音の乳母車を押しているという描写をいかにきちんとするか。これは石牟礼道子さんの世界ではないと思つています。石牟礼道子さんはそういうとらえ方はしないと思いますよ。彼女の本をずいぶん読みましたけど。私はフィクションとノンフィクションの差をそこでつけたい。

### 工場労働者の証言

現役の工場労働者が作業実態について証言した例はそんなにはないと思いますよ。引退現役合わせて二十五人です。特に現役の労働者が証言をした。これはやっぱり水俣の組合の運動の歴史ですよ。水俣の組合は、三十五年の水俣病闘争のとき、大変なことだったんだけど、三十七年に安賃闘争、安定賃金闘争をするわけです。組合が真っ二つに分れる。石炭では三池闘争が昭和三十五年、化学産業では安賃闘争三十七年です。久留米で労働運動をやっていた人から、安賃闘争の

とき水俣行つたんですよ、という話を聞きました。安賃闘争とは何かというと、給料を高い水準に保てるようにする。それだけのものはいま協定で約束しますと。代わりに労働争議をしないという約束をしるということです。要するに、ストライキを打たせない約束です。第三組合までありましてね。第一組合は昔からの総評で、当時の政党からいうと社会党支持です。第二組合は分裂した会社側の労働組合です。第三組合というのがあって、第二次安賃闘争一九七〇年の安賃闘争の世代、今の言葉でいうと新左翼のグループです。

結局、組合はわれわれが裁判を起こしたときに「恥の宣言」というのをやる。「労働組合としてのきちんとした精神を自分たちは貫いていなかった」。私の表現で正しいかどうかわかりませんが、私の理解では、「自分の経済的利益のことしか思わなかった。だから水俣病の患者と一緒に闘う共通の問題なんだという理解をしていなかった。いまからは一緒に闘う闘います」という宣言です。労働組合としてはなかなかできなかったことだと思います。だから証人として現役労働者が協力してでてるわけですね。

ただ、最初私たちは、証人が一人もいなくて、立ち往生していた。裁判自体がぶつ潰れそうだった。チツソからは切り崩しをうけて、降りる原告が出てきた。私が水俣に行くきっかけの一つです。そのときはすぐには証人に立つてくれなかった。私たちが頼みに行ったら「あなたは現役労働者が証言に立つことの困難さをわかっていない。簡単に立つことな

「なんてできるわけない」。恥の宣言があつたんじゃないですかね。無条件で協力してくれるんじゃないですか。そういう感覚的なズレがあつた。簡単に証人に出ると思うなとお叱りを受けるわけです。証人に出てほしいのであれば、それなりのことをしてこい。弁護士は当てにならない。弁護士の首を切ろうか、という運動をしていた中心的なひとたちです。しょうがない、崖っぷちでほかに方法がないので禁じ手なんだけども、な、といって、工場長の尋問に入つたわけですよ。工場長の尋問を一年間やりました。その間に実績をつくつた。やっぱりそれなりの評価はしてもらえたんだと思いますよ。じゃあ、協力するかという話になって、工場労働者を証人に立てよう。

ここでも何を証言するのか、証言の中身をめぐって意見が対立するわけです。組合の中心的な考え方は技術論です。チツソの精製過程で有機水銀とか、そういう技術論を証言したいわけです。われわれは、「いや、そういう証言は結構です。そうではなくて、いかに危ないかというエピソードがほしい」、「そんなの意味がないでしょう」、というやり取りになる。労働者を大事にしないということでもいいじゃないですか。労働者を大事にしない会社ですと。「牛馬と思え」という有名な社長の言葉があるわけですから。というあたりで妥協点が証言となる。証言集が出ている。操業実体として面白いと思いますよ。

たとえば、塩化ビニールの工場で働いている。だから自分

の職場で排水を出している。工場のすぐ横の丸島という集落に住んでいる。仕事が終わって、夜、自宅に帰って晩酌をしていたら煙が流れてくる。丸島というところでは粉じんがすごい。下に粉じんが溜まるから瓦が浮き上がっている。煙がきたら直ちに工場に電話かけて抗議する。「いま、何やってるんだ。こんなに煙が来ているぞ。おちおち飯も食べられんぞ」と。排水路のすぐそばで、庭に木を植えていて、その木が途中まで順調に育つんだけど、何年かたつたらすぐ枯れる。なんで枯れるのか、掘ってみたたら、排水がしみこんで来る高さまで根がのびてきたら根が枯れてしまう。排水路から水がしみ込んでいた。また植え直しても同じこと。排水路の近くは何年植え替えても枯れてしまうという被害ですね。

### 「人間のホームラン」

私たちはそういう証言に徹して、そういう証言を積み重ねた。肝心の原因物質のアセトアルデヒドの工場労働者は、最初に工場を造ったときに入って、最後に工場を閉めたときに定年退職した、最初から最後まで労働をしてきた。さすが組合ですよ。組合としては製造技術の話をしてほしい。私は中学を出たあとの入社試験から尋ねた。

チツソに就職できるのは大変なエリートなんですね。しかも中学を出て入ってボーイといって下働きをさせられる。正



社員になる。あとで幹部まで出世できるコース、優秀な子どもなんですね。社宅は全部どこに住んでいるかで階級がわかる。労働者の社宅と高級幹部の社宅は違う。最高幹部のところにボーイはお手伝いに行かされる。「これをもつて小学校に届けてくれ」と、その奥さんから言われる。何かわからないけど持つて行った。後で聞いたら、検便の中身を持つていかされた。「子どもに自分で持つて行かせればいいのに。自分はそのときに情けない思いをした」という証言です。

入社すると、工場の中の下働きです。アセトアルデヒド排水が詰まる。詰まると鉄棒でかき混ぜる。ものすごい悪臭たそうです。定期的に詰まるものだから、詰まったものをかき混ぜて、そのまま海に流しますよという話があるわけです。その作業をずっと続けさせられたものだから、完全に呼吸器を痛めて、血を吐いた。天草の小島から来っていた。会社の方の病院の医者は「これは呼吸器疾患だから帰って静養した方がいい。家に戻れ」と。入社試験のとき、西田工場が聞いたのは、「この工場は危険で爆発するぞ。いつ死んでもおかしくないけど、それで構わないか」、「自分はチツソに入りたい一心で、いつ死んでも結構です」と答えた。それだけで採用された。学校の成績がもちろん優秀だった。試験はそれだけだった。自分は命を懸けて出てきた。いまさら帰るわけにはいかない。その労働者がその時泣いたんですよ。みんな静まりかえった。命を懸けてきているのに帰ることなどできない。帰らずに静養して結局、一生アセトアルデヒドの製造工場を

勤めあげた。

工場はしょっちゅう爆発した。爆発したときに当然大きな音が響くもんだから、何が起きたのか。正門前にわあっとおかみさんたちが集まってきて、「どこが爆発したのか」と。アセトアルデヒド工場に決まっている。労働者の証言というのはもつぱらそういう話を積み重ねた。これも大きかったと思いますよ。しょっちゅう爆発して、技術的に危ないに決まっている。しかも労働者はみんな命を懸けていた。アセトアルデヒドの工程の中でドラム自体が回転するわけです。温度計が付いている。温度が高くなると爆発する。温度計を見張っていないといけない。温度計自体も回っている。「うっかりそれを見落としたり、爆発して人間のホームランですもん。人間のホームランにならないように一生懸命見とかなんといけない。動体視力がよくなりました」。人間のホームラン」という言葉がずっと出てくる。日常的にそういう表現を使っていた。チツソの責任は七・一五条ではありません。七〇九条ですという話になるわけですね。誰かがエラーをした話ではありません。会社としての責任です。

（続く）